

室蘭工業大学国際交流センター

Center for International Relations
Muroran Institute of Technology

2010年度 活動報告書

Annual Report, 2010



目 次

| | |
|------------------------------|----|
| 1. 報告書の発刊にあたって | 1 |
| 国際交流センター長（理事・副学長） 野 口 徹 | |
| 2. 国際交流センターの業務 | 3 |
| 3. 国際交流センターの組織 | 4 |
| 4. 学内及び学外の会議 | 7 |
| 5. 国際学术交流 | 13 |
| 6. 外国人留学生 | 16 |
| 7. 国際交流センター教員が担当した講義 | 24 |
| 8. 室蘭工業大学国際セミナー | 29 |
| 9. 留学生を対象とした行事，研修等 | 30 |
| 10. 学术交流協定校との交流 | 36 |
| 11. 学生の海外への派遣 | 40 |
| 12. 外国人研究員，外国人インターンシップ研修生受入れ | 45 |
| 13. 国際交流クラブ | 46 |
| 14. 広報活動 | 47 |
| 15. 教員の研究活動 | 48 |
| 16. 国際交流センターに関する新聞記事等 | 49 |
| 17. おわりに | 52 |
| 国際交流センター准教授 門 澤 健 也 | |

※表紙写真 むろらん港まつり「総参加市民踊り」

1. 報告書の発刊にあたって

国際交流センター長（理事・副学長） 野 口 徹

1.1 本報告書の趣旨

この報告書は、各年度の当センターの現状、活動とその成果ならびに課題を記録し、また大学当局への報告とすることを第一の目的として、昨年度から発行を始めたものです。この報告によって、学内では教職員、学生の理解、支援と参画を促進する効果を期待し、学外に対しては、本学の国際活動の現状を積極的に発信し、広報する機会ともしています。学内、学外からの評価やご意見を受け、また助言提言が得られるならば、センターの活動における PDCA (Plan-Do-Check-Action) のサイクルを回し、さらなる発展に繋げることができます。これらは室蘭工業大学全体の国際化、ひいては教育、研究の発展に寄与します。さらに、地域の国際交流活動の発展にも貢献できるよう願っています。

1.2 高等教育を巡る国際情勢

近年「高等教育の国際化、Global 化」は世界的な流れです。Global 化は次の2つの要素を含んでいます。(1) 大学卒業者の専門能力の国際的通用性の要求および企業採用の国際化、ならびに(2) 高等教育の国際マーケット化、(すなわち、留学生の招致合戦)、の2つです。アメリカはすでに(1)、(2)のいずれについても抜きん出ており、さらにその傾向を強めています。ヨーロッパ連合もまたボローニャプロセス等によって、域内の高等教育の共通化を進めています。アジアでも ASEAN 諸国は従来から教育における緊密な連携を行っており、中国もまた(1)、(2)ともに、独自の国家戦略を展開しています。このような流れに遅れをとることは我が国の国益を大きく損なうこととなります。中国、韓国、日本の東アジア3国での高等教育の共通化をめざす ASIAN CAMPUS 計画は我国からの遅ればせながらの提案です。室蘭工業大学もまた、国立大学として、その理念・目標に謳っている「深い専門性と国際性を有する学生を教育し」、「教育・研究で国際社会に貢献する」との責務を果たすことが求められています。

1.3 本学の国際交流活動の概略

本学では、2008年の当国際交流センターの設立によって、国際化に対する体制が整えられ、機能が飛躍的に向上しました。これは第6節の留学生数のヒストグラムに顕著に表れています。昨2009年度に在籍留学生数が初めて100名の大台を超え、2010年度は過去最多の114名を記録しました。これに対応し、2010年度には国際交流センターの専任教員として日本語担当の山路准教授が着任しました。さらに、これまでの兼任教員制度に代えて、各領域から選出された委員による国際交流委員会を発足させました。国際交流関係の色々な問題について、単なる審議や決定だけでなく、企画立案、提案、さらには実働の役割も担っています。

学術交流協定校とは、特にタイ、中国、韓国、オーストラリア、ロシア各国の大学と、留学生や研修生の往来、ジョイント 세미나等、活発な交流が行われています。2010年度にはタイの泰日工業大学、台湾の大葉大学、ウクライナのプリアゾフキー国立工科大学の3大学と交流協定を締結しました。スペインのグラナダ大学、マドリッド自治大学の2校との交流協定は、残念ながら

終了となりました。一方、中国では、河南理工大学をセンターに、本学卒業の中国人留学生同窓会が立ち上げられました。2011年度も交流のさらなる進展が期待されています。

学生の海外活動としては、6名の学生がヨーロッパやメキシコでの長期インターンシップを体験し大きな成果を上げました。この中には本学から始めて IAESTE（国際学生技術研修協会）の派遣生として、ハンガリーで研修した大学院学生1名が含まれています。昨年からは佐藤矩康博士記念国際活動奨学賞は、前期、後期併せて10名の学生に授与され、海外に派遣されました。また受け入れとしては、フランスの高等工業大学 SUPMECA の学生2名がインターンシップ研修生として来訪し、4カ月間の研究体験をしました。外国人学生が英語だけで大学院コースを修了できる「英語コース」の編成や、マレーシアの大学の学生を本学の3年目に編入させるプログラムの受け入れも検討が進められています。

1.4 国際交流に関する課題

留学生の増加や国際交流活動の活発化は国際社会の要請であり、同時に教育研究の活性化によって本学の存在意義、評価の向上に繋がります。しかしこれに伴って幾つかの問題も生じ始めています。ひとつは「留学生の多様化」です。100名を越える学生の中には、勉学や研究に順調に適應できない者が出てきます。これは本人にとって不幸であるとともに、受け入れ教員や職員にも過大な労力、負担を課すこととなります。もうひとつは、国際交流を担当するエキスパート職員の確保です。大学の国際交流支援には、会話力はもとより契約文書など高度な外国語能力と、豊富な国際経験、さらには教育研究への理解も求められます。これには一般職と異なる能力と経歴の人材を専門職として養成していく必要があります。教員についても、できるだけ多くの教員が国際交流に関与することが望まれます。奨学金等の活動資金の確保もまた大きな課題です。これらを総合して、国際交流の有効な施策をたてていくことが求められています。

1.5 東日本大震災の影響

年度末の3月11日に生じた東日本大震災によって、本学学生の中にも家族や家屋の被災者が出ました。幸い留学生に直接の被害はありませんでしたが、国際交流には以下のような影響がありました。

2011年度留学予定者の辞退4名（中国2名、韓国2名）、短期研修辞退5名（タイ）、およびインターンシップ研修生の辞退1名（インド）です。福島原発の事態推移によっては、さらに種々の影響が懸念されます。北海道、本学の安全状態について、積極的に発信してゆくことが必要と考えています。

2. 国際交流センターの業務

現在の国際交流センターの業務は次のとおりである。

- (1) 国際交流事業に関すること
 - ・ 外国の大学等との交流協定締結, 更新等の支援事務
 - ・ 交流協定校等との交流事業, 行事の支援
 - ・ 本学教職員の国際活動の支援
 - ・ 本学学生の国際性教育の支援
 - ・ 本学の国際交流推進に係わる企画と立案, その支援

- (2) 外国人留学生に関すること
 - ・ 留学生(正規生, 研究生, 聴講学生, 短期研修生, インターンシップ研修生を含む)の受入れ支援及び受入れの促進
 - ・ 留学生に対する日本語教育その他の教育と, 共通教育及び専門教育の修学支援
 - ・ 留学生のための宿舎など生活支援にかかわる業務, 相談への対応
 - ・ 留学生のための各種奨学金の広報, 応募, 申請, 配分支援などに係わる業務
 - ・ 卒業, 修了者も含めた留学生との交流促進

- (3) 外国人研究員に関すること
 - ・ 外国からの研究員, 教職員の受け入れ支援

- (4) 学生の海外派遣に関すること
 - ・ 本学学生の海外留学, 短期研修, 国際会議参加などの支援

- (5) その他, 国際交流及び留学生に関すること
 - ・ 国際交流に係わる他大学, 地域自治体, 諸機関との連携活動

3. 国際交流センターの組織

3.1 国際交流センターの構成員

2010 年度(平成 22 年度)の国際交流センターの人員構成は、専任教員2名、事務職員3名及び事務補佐員2名の計 7 名である。センター長は理事(連携担当)・副学長が兼務している。

教員では、酒井教授が退任し、日本語教育担当の山路准教授が着任した。

| | |
|-----------|---------------|
| 国際交流センター長 | 野 口 徹(理事・副学長) |
| 専任准教授 | 門 澤 健 也 |
| 専任准教授 | 山 路 奈保子 |
| 事務室長 | 塩 崎 泰 子 |
| 国際交流係 | 成 瀬 拓 矢 |
| 国際交流係 | 南 圭 奈 |
| 事務補佐員 | 須 藤 弥 生 |
| 事務補佐員 | 内 藤 直 子 |



左より、内藤 直子、宮下 慎也、山路 奈保子、野口 徹、門澤 健也、塩崎 泰子、南 圭奈、須藤 弥生
(2011 年度メンバー)

3.2 国際交流委員会

2010 年度から、従来の兼任教員に代わり、新たに「国際交流委員会」が発足した。その任務は次のとおりである。同委員会は、議題の審議に加え、本学の国際交流に関連する企画立案、提言、事業実施への協力支援を担う。

- (1) 国際学术交流及び国際交流事業に関すること。
- (2) 外国人留学生の受入れに関すること。(外国人留学生入試に係るものは除く。)
- (3) 外国人留学生の奨学金に関すること。
- (4) 学生の海外留学に関すること。
- (5) 外国人研究者の受入れに関すること。
- (6) 外国人インターンシップ研修生の受入れに関すること。
- (7) その他国際交流事業及び外国人留学生に関する事項

| 所 属 | 職 名 | 氏 名 |
|-------------|-------|---------------|
| 国際交流センター | センター長 | 野 口 徹 |
| 国際交流センター | 准教授 | 門 澤 健 也 |
| 国際交流センター | 准教授 | 山 路 奈保子 |
| 建築社会基盤系学科 | 教 授 | 大坂谷 吉 行 |
| 建築社会基盤系学科 | 准教授 | 吉 田 英 樹 |
| 機械航空創造系学科 | 教 授 | 世 利 修 美 |
| 機械航空創造系学科 | 教 授 | 平 井 伸 治 |
| 応用理化学系学科 | 教 授 | 小 幡 英 二 |
| 応用理化学系学科 | 准教授 | 澤 田 研 |
| 情報電子工学系学科 | 教 授 | 福 田 永 |
| 情報電子工学系学科 | 教 授 | 施 建 明 |
| 全学共通教育センター | 教 授 | 橋 本 邦 彦 |
| 全学共通教育センター | 准教授 | クラウゼ=オノ・マルギット |
| 国際交流センター事務室 | 室 長 | 塩 崎 泰 子 |



クラウゼ=オノ・マルギット



小幡英二



世利修美



平井伸治



大坂谷吉行



施建明



吉田英樹



橋本邦彦



澤田研



福田永

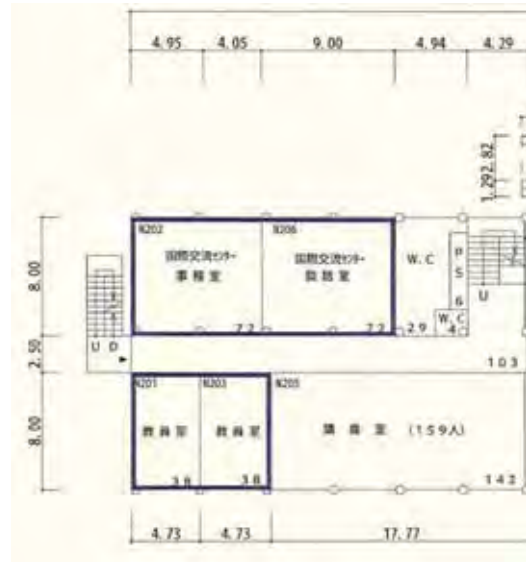
3.3 センターの活動拠点

国際交流センターの活動拠点は以下の図及び写真に示す事務室、談話室並びに 2 名の専任教員の教員室である。

2010 年度末に談話室の間仕切り工事をおこなった。留学生同士および留学生と学生、教職員の交流懇談を目的として 2 スパンの談話室が準備されていたが、その半分が日本語教育の講義室ならびに国際交流委員会等の会議室として頻繁に利用されていることから、本来の機能が十分果たせていない状態であった。これを可動式の遮音壁で間仕切りし、かつセンター事務室との間にドアを設けて直接通行を可能にし、本来の交流談話の機能を十分に発揮することができるようにした。留学生教育に有効に使用することが期待されている。



国際交流センター事務室内



国際交流センター事務室と談話室との間のドア



国際交流センター談話室



日本語授業風景

4. 学内及び学外の会議

4.1 国際交流委員会

2010年4月から国際交流委員会が設けられ、国際交流センター連絡会議は廃止された。

国際交流委員会は、(1) 理事又は副学長のうちから学長が指名する者、(2) 国際交流センター一長、(3) 国際交流センター専任教員、(4) 各学科及び全学共通教育センターから選出された講師以上の教員 各2名。ただし、1名は教授とする。(5) 国際交流センター事務室長、(6) その他学長が必要と認めた者が構成員となることにした。

2010年度の国際交流委員会の開催日及び審議事項は以下のとおりである。

第1回 2010年4月20日(火)

- 議題1 私費外国人留学生支援奨学金受給者の選考について
- 議題2 学術交流協定に基づく派遣留学生の選考方法(案)について
- 議題3 民間団体等からの奨学金受給者の選考について
- 議題4 国際交流委員会の任期について
- 議題5 国際交流委員会への代理出席について
- 議題6 国際交流センターの運営方針について
- 報告事項1 2010年度留学生名簿について
- 報告事項2 留学生オリエンテーション等について

第2回 2010年5月11日(火)

- 議題1 私費外国人留学生学習奨励費受給者の選考について
- 議題2 特別聴講学生(外国人留学生)の受入れについて
- 報告事項1 派遣留学生の選考結果について
- 報告事項2 民間団体等奨学金受給者の推薦について
- 報告事項3 平成22年度国際交流センター事業計画について

第3回 2010年6月18日(金)

- 議題1 特別研究学生(外国人留学生)の期間延長について
- 議題2 室蘭工業大学外国人短期研修生受入要項(案)について
- 議題3 室蘭工業大学外国人インターンシップ研修生受入要項(案)について
- 報告事項1 学術交流協定校からのサマースクールについて

第4回 2010年7月13日(火)

- 議題1 研究生(外国人留学生)の選考について
- 議題2 研究生(外国人留学生)の期間延長について
- 議題3 ロシア・極東工科大学との学生交流に関する覚書の締結について
- 報告事項1 オーストラリアロイヤルメルボルン工科大学語学研修について
- 報告事項2 民間団体等奨学金受給者の推薦について
- 報告事項3 国際交流センター活動報告書について
- 報告事項4 日本学生支援機構主催外国人留学生等進学説明会について

報告事項5 関東地域就職留学生同窓会の設立について

第5回 2010年8月25日(水)

議題1 科目等履修生の科目追加について

第6回 2010年10月7日(木)

議題1 室蘭工業大学私費外国人留学生支援奨学金受給者の選考について

議題2 河南理工大学との交流協定の更新について

報告事項1 ロシア極東工科大学との総会及び研究報告会について

報告事項2 21世紀東アジア青少年大交流計画ベトナム高校生訪日団訪問について

報告事項3 河南ジャパンウィーク及び中国帰国留学生情報交換会及び同窓会設立について

報告事項4 オーストラリアロイヤルメルボルン工科大学語学研修について

報告事項5 民間財団奨学金被推薦者について

報告事項6 留学生数について

第7回 2010年10月28日(木)

議題1 中国大連交通大学との学術交流協定の更新について

議題2 ロシアニコラエフ無機化学研究所との学術交流協定の更新について

議題3 台湾大葉大学との学術交流協定締結について

議題4 ウクライナプリアゾフスキー国立工科大学との学術交流協定締結について

議題5 室蘭工業大学国内採用による国費外国人留学生(研究留学生)選考基準改正について

報告事項1 スペイングラナダ大学との学術交流協定終了について

報告事項2 中国人帰国留学生同窓会について

報告事項3 第37回室工大国際セミナーの開催について

報告事項4 RMIT日本語研修について

第8回 2010年11月26日(金)

議題1 研究生(外国人留学生)の選考について

議題2 平成23年度国内採用による国費外国人留学生(研究留学生)被推薦者の選考について

議題3 釜慶大学校工科大学との学術交流協定の更新について

議題4 学術交流協定締結までの手順の改正について

報告事項1 室蘭工業大学短期留学生(受入れ)支援奨学金受給者について

報告事項2 外国人留学生室蘭岳登山について

報告事項3 第37回室工大国際セミナーについて

報告事項4 RMIT日本語研修生の受入れについて

報告事項5 マドリッド自治大学との学術交流協定終了について

第9回 2011年2月4日(金)

議題1 室蘭工業大学大学推薦による国費外国人留学生(研究留学生)選考基準改正について

議題2 大学推薦による国費外国人留学生(研究留学生)の選考について

- 議題3 マレーシア政府派遣留学生の受入れについて
- 議題4 研究生（外国人留学生）の選考について
- 議題5 特別研究学生（外国人留学生）の受入れについて
- 議題6 特別聴講学生（外国人留学生）の受入れについて
- 議題7 室蘭工業大学短期留学生（受入れ）支援奨学金受給者の選考について
- 議題8 中期計画・中期目標平成23年度年度計画（案）について
- 報告事項1 ヨーロッパ語学研修について
- 報告事項2 佐藤奨学賞募集状況について
- 報告事項3 マレーシアJADプログラムによる編入学生の受入れについて
- 報告事項4 国際交流センター広報誌の発行について
- 報告事項5 留学生交流会について
- 報告事項6 民間財団等奨学金推薦について

第10回 2011年3月9日（水）

- 議題1. 特別研究学生（外国人留学生）の受入れについて

4.2 国際交流センター教職員打合せ会議

原則として、毎週金曜日（11時から12時）に、センター教職員と連絡調整を兼ねた打合せ会議を開催している。

4.3 室蘭市国際交流推進協議会

室蘭市の国際交流推進協議会に加入している団体に本学の事業等を説明し、意見交換を行っている。

開催日：5月27日（木） 場所：中島会館

出席：山路 奈保子

主催 室蘭市国際交流推進協議会

参加団体 室蘭工業大学

室蘭国際交流センター、室蘭市体育協会、室蘭商工会議所、室蘭文化連盟、登別室蘭青年会議所、室蘭地区高等学校校長会、胆振国際理解教育研究会、室蘭ロータリークラブ、室蘭ライオンズクラブ、室蘭市女性団体連絡協議会、国際ソロプチミスト室蘭、室蘭ルネッサンス、ノックスビルの会

本学からは、佐藤学長が室蘭市国際交流推進協議会会長として、また山路准教授が本学国際交流センター代表として出席。

- 議題： 1. 平成21年度事業報告並びに決算報告について
 2. 平成21年度監査報告について
 3. 平成22年度事業計画並びに予算(案)について

4.4 平成22年度留学生交流研究協議

開催日:7月8日(木), 9日(金), 場所:国立オリンピック記念青少年総合センター

出席:山路 奈保子

1. 留学生関係省庁, 機関所管事項説明(文部科学省, 法務省, 外務省, 厚生労働省, 経済産業省, 国土交通省, 国土交通省観光庁, 日本学生支援機構)
2. パネルディスカッション:留学生交流と危機管理
明治大学国際日本学部教授 横田 雅弘
大阪大学国際部学生交流推進課課長 石野 隆志
拓殖大学国際部担当部長 岸澤 輝明
群馬大学国際教育・研究センター講師 園田智子
福岡国際大学国際コミュニケーション学部准教授 竹熊 真波

4.5 平成22年度 第1回札幌商アジア・ブリッジ・プログラム連絡協議会

開催日:8月3日(火), 場所:北海道経済センター

出席:塩崎 泰子

- 議題:1. 3期生の状況について
2. 調査事業について
 3. 「アジア・ブリッジ・フェス」の開催について
 4. 自立化の状況について

4.6 札幌商工会議所アジアブリッジプログラム大学向け報告会

開催日:10月19日(火), 場所:アスティ45

出席:門澤 健也, 塩崎 泰子

1. 「留学生への就職支援」について
株式会社パソナ パソナキャリアカンパニー札幌支店官公庁事業部顧問 紺野 猷邦
2. 「ビジネス日本語・日本ビジネス教育」について
札幌商工会議所ビジネス日本語教育コーディネーター 瀧川 浩子
IAYインターナショナルアカデミー日本語講師 三由 祐基子

4.7 平成22年度国立大学法人留学生担当課長等会議出席

開催日:11月4日(木), 場所:KKRホテル東京

出席:塩崎 泰子

1. 大学の国際化と留学生政策について
文部科学省高等教育局高等教育企画課国際企画室長 氷見谷 直紀
2. 日本学生支援機構における留学生支援事業について
日本学生支援機構留学生事業部長 鈴木 美智子

4.8 平成22年度国立大学法人等国際企画担当責任者連絡協議会

開催日:11月5日(金), 場所:文部科学省講堂

出席:野口 徹, 塩崎 泰子

第一部 1. 科学技術分野における国際協力への取組

文部科学省科学技術・学術政策局国際交流官補佐 水野 俊晃

2. 大学の国際化と学生の双方向交流について

文部科学省高等教育局高等教育企画課国際企画室長 氷見谷 直紀

3. グローバル人材育成のための大学教育プログラムに関する実証的研究

文部科学省大臣官房国際課国際協力政策室長 浅井 孝司

上智大学総合人間科学部教育学科准教授 北村 友人

第二部 1. 「大学の国際化に向けた課題—短期留学を中心に—」

国立大学法人財務経営センター教授 金子元久氏

2. 「ICUの留学生交流」 国際基督教大学 学務副学長 日比谷潤子

3. 「千葉大学の留学生交流」 千葉大学国際教育センター長 新倉涼子

4.9 北海道地区留学生担当教職員連絡会議

開催日:11月26日(金), 場所:北海道大学国際本部留学生センター

出席:山路 奈保子

シンポジウム:留学生受入れの実践と課題—各大学の取り組み

1. 「日本人学生との交流」

北海道教育大学国際交流・協力センター准教授 大賀 京子

2. 「ホストファミリーとの関わりについて」

北星学園大学学生支援課課長 前村 俊一郎

3. 「日本語コースの立ち上げについて」

藤女子大学国際交流センター主任 品田 実花

4.10 北海道留学生交流推進協議会総会

開催日:12月3日(金), 場所:北海道大学情報教育館

出席:野口 徹

1. 講演 文科省高等教育局学生・留学生課留学生交流室長補佐 山口 茂

2. 北海道の留学生受け入れの現状 北大留学生交流推進課

4.11 平成22年度室蘭工業大学留学生交流推進懇談会

本学の留学生に対し、市内等の国際交流推進関係諸団体から種々の支援を受けていることから、これら諸団体に対し本学の留学生に対する取り組み状況等を説明し、意見交換を通して理解を得ると共に、今後の留学生受入れ及び学生生活に関し、なお一層の支援を仰ぎ留学生交流事業の円滑な推進を図ることを目的として、以下のとおり懇談会を開催した。

開催日 平成23年2月25日(金) 場 所 蓬岫殿

出席団体 登別市企画グループ, 室蘭市小学校長会, 室蘭ロータリークラブ, 室蘭東ロータリークラブ, 登別ロータリークラブ, 室蘭国際交流センター, 室蘭ルネッサンス, 国際ソロプチミスト, 室蘭ユネスコ協会, 内モンゴル教育基金, 噴火湾海洋動物観察協会, NPO法人羅針盤, 室蘭消費者協会, 登別室蘭青年会議所, 北海道開発局室蘭開発建設部, 北海道胆振総合振興局, 北海道新聞室蘭支社, 室蘭民報社

1. 室蘭工業大学における留学生の受入れの現況について説明
2. 意見交換

4.12 平成22年度北海道・中国交流推進連絡会議

開催日:3月16日(水), 場所:ポールスター札幌

出席:山路 奈保子

- 議題:1. 黒竜江省との友好提携25周年記念事業について
2. 平成22年度決算及び平成23年度予算について

5. 国際学術交流

5.1 国際学術交流協定

本学は、その教育研究活動の国際化を進めるために、外国の大学、研究機関と学術交流協定を締結し、交流の促進に努めている。最初の交流協定は1985年(昭和60年)に、アメリカオレゴン州のオレゴン工科大学との間で締結された。以後着実にその数を増加させ、2010年度(平成22年度)末で29大学・機関に達している。

国別では中国7大学、韓国5大学、タイ2大学、アメリカ2大学、ロシア2大学・機関、ドイツ2大学、以下、オーストラリア、フィンランド、オーストリア、ハンガリー、ベトナム、ポーランド、ウクライナ、台湾が各1大学である。

2010年度は、タイの泰日工業大学、ウクライナのプリアゾフスキー国立工科大学と台湾の大葉大学との交流協定を締結した。また、釜慶大学校工科大学、河南理工大学、大連交通大学、キングモンクット工科大学、ニコラエフ無機化学研究所との交流協定の更新が行われた。

【大学間学術交流協定】

以下のとおり、2010年度末において国際学術交流協定は28大学・1機関となっている。

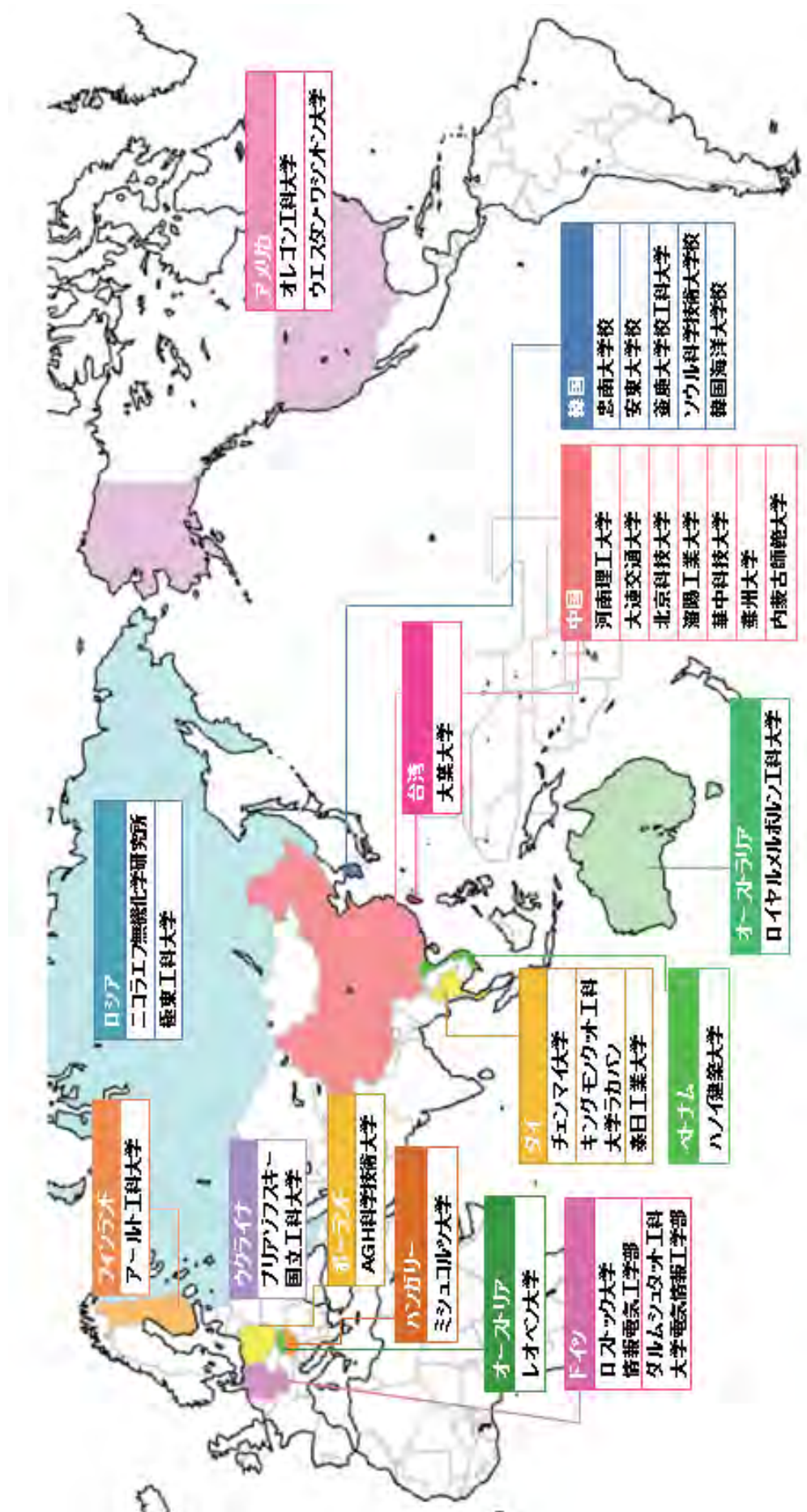
| | 締結大学名 | 国名 | 締結年月日 | 担当教員名 |
|----|------------------|---------|-------------|-------------------------------|
| 1 | オレゴン工科大学 | アメリカ | 1985年10月17日 | |
| 2 | 河南理工大学 | 中国 | 1988年11月11日 | 教授 板倉賢一 |
| 3 | 大連交通大学 | 中国 | 1996年10月1日 | |
| 4 | ロイヤルメルボルン工科大学 | オーストラリア | 1999年3月26日 | 准教授 門澤健也 |
| 5 | ウェスタン・ワシントン大学 | アメリカ | 2000年10月27日 | |
| 6 | アアルト大学電気通信学科 | フィンランド | 2001年3月15日 | 教授 鈴木幸司 |
| 7 | 北京科技大学 | 中国 | 2004年2月2日 | 准教授 魚住 超 |
| 8 | ロストック大学情報電気工学部 | ドイツ | 2004年2月20日 | 准教授 川口秀樹 准教授 クラウゼ=オノ・マルギット |
| 9 | 忠南大学校 | 韓国 | 2004年4月20日 | 教授 濱 幸雄 教授 鈴木幸司 |
| 10 | 安東大学校 | 韓国 | 2004年6月8日 | 教授 臺丸谷政志 准教授 藤木裕行 |
| 11 | 釜慶大学校工科大学 | 韓国 | 2004年9月1日 | 教授 中野博人 講師 長船康裕 |
| 12 | チェンマイ大学 | タイ | 2005年4月19日 | 准教授 門澤健也 |
| 13 | キングモンクット工科大学ラカバン | タイ | 2005年4月20日 | 准教授 門澤健也 |
| 14 | ニコラエフ無機化学研究所 | ロシア | 2005年5月30日 | 教授 平井伸治 |
| 15 | レオベン大学 | オーストリア | 2006年10月10日 | |

| | | | | |
|----|-------------------------|-------|-------------|-------------------------------|
| 16 | ミシュコルツ大学 | ハンガリー | 2006年11月13日 | |
| 17 | 極東工科大学 | ロシア | 2007年1月19日 | 教授 板倉賢一 教授 媚山政良 教授 後藤龍彦 |
| 18 | ハノイ建築大学 | ベトナム | 2007年3月27日 | |
| 19 | ソウル科学技術大学校 | 韓国 | 2007年7月25日 | 准教授 張 俗喆 |
| 20 | ダルムシュタット工科大学電気情報工 学部 | ドイツ | 2007年11月9日 | 准教授 川口秀樹 |
| 21 | 瀋陽工業大学 | 中国 | 2007年11月9日 | |
| 22 | 華中科技大学 | 中国 | 2007年11月12日 | 教授 施 建明 |
| 23 | 蘇州大学 | 中国 | 2007年11月26日 | 教授 施 建明 |
| 24 | 内モンゴ師範大学 | 中国 | 2008年6月2日 | 教授 岩佐達郎 |
| 25 | 韓国海洋大学校 | 韓国 | 2009年1月19日 | 教授 木村克俊 |
| 26 | AGH科学技術大学 | ポーランド | 2009年8月27日 | 教授 板倉賢一 准教授 魚住 超 |
| 27 | 泰日工業大学 | タイ | 2010年4月1日 | 教授 塩谷 浩之 准教授 藤木 裕行 |
| 28 | プリアゾフスキー国立工科大学 | ウクライナ | 2010年11月16日 | 理事 野口 徹 教授 清水一道 講師 吉田英樹 |
| 29 | 大葉大学 | 台湾 | 2010年12月1日 | 准教授 山路奈保子 准教授 門澤健也 |

【三者間学術交流協定】

| 締結大学名 | 国名 | 締結年月日 | 担当教員名 |
|-----------------|-----|-------------|---------|
| ニコラエフ無機化学研究所 | ロシア | 2008年11月18日 | 教授 平井伸治 |
| 独立行政法人産業技術総合研究所 | 日本 | | |

図1 本学との学術交流協定校



6. 外国人留学生

6.1 留学生数

本学は、1979年から外国人留学生を受入れており、留学生数は2003年の60名をピークに、2006年には45名まで減少したが、国際交流センター設置後は、留学生数も大幅に増加し、2009年は初めて100人に到達し、2011年は106名を受け入れるに至った。

これまでの留学生受入れの推移を表1に、留学生数(学科別・学年別)をグラフ1に、また、留学生数(国籍別・身分別)を表2に示す。

なお、本活動報告書は2010年度版であるが、10月入学者がいることから、調査・統計の関係上、2010年5月1日ではなく、2011年5月1日の数字を計上した。

6.2 留学生数の推移に関する考察と展望

表1に見るように、1979年から1986年までは政府派遣留学生が大半を占めており、これは国交を回復した直後の中国からの留学生がほとんどだった。

1988年からは、当時の中曽根首相のいわゆる「留学生10万人計画」を受けて、国費留学生の数が増加していく。また同年から、マレーシア政府派遣留学生の受入れも始まり、留学生数は徐々に増加していった。さらに1993年から2003年ごろまでは国費留学生が安定的に配分され、2003年には本学の留学生受入れが始まってから最大の60人に達した。

2007年に国際交流センターが設置されてからは、留学生獲得のため国内・国外での広報活動に努力し、さらに国費や外国政府派遣のみに頼らない本学独自の私費留学生に対する奨学金制度を創設するなどの措置をとったため、2008年からは増加に転じ、2009年には、2006年に一旦底を打った45人の2倍超である100人に到達した。

このことには上記以外に、次の3つの理由も大きいと思われる。

- ①学術交流協定校からの短期留学生が増加したこと。
- ②上記の短期留学生も含めて、在学する留学生に対する国際交流センターや本学全体の支援が、留学生に好感を持って理解され、それがそれぞれの国の留学志願者や国内の高専からの編入学希望者に伝わって、本学を志望する学生が増えたこと。
- ③短期留学生が本学で半年から1年学ぶ間に、本学や室蘭を気に入り、信頼できる指導教員も見つけて、その後修士課程や博士課程に再度留学してくるケースが出てきたこと。

今後の展望としては、いわゆる「留学生30万人計画」もあり、本学としても現在の100人超から、150人、さらには200人以上を目標として留学生の増加を図っていくことが求められる。

しかしながら、前述したように2006年の留学生数45人から、国際交流センター設置後に2年をかけて100人まで増やしたときには、宿舍の確保が最重要かつ緊急の課題となり、次のような措置でこれに対応した経緯がある。

- ①民間アパートを大学が借り上げて、既設の留学生宿舍と同じ家賃で留学生を居住させた。
- ②職員宿舍の一部を留学生用に転用した。
- ③室蘭市営アパートの一部を、本学が入退去を管理する留学生専用宿舍として確保した。
- ④明德寮に留学生用の部屋を確保した。

留学生数の拡大には、奨学金及び宿舍の確保が最大の課題である。

表1 留学生数(年度別)集計(各年5月1日現在)

| | 工学部 | | | 博士前期課程 | | | 博士後期課程 | | | 研究生等 | | | 小計 | | | 合計 |
|------|-----|----|----|--------|----|----|--------|----|----|------|----|----|----|----|----|-----|
| | 国費 | 政府 | 私費 | 国費 | 政府 | 私費 | 国費 | 政府 | 私費 | 国費 | 政府 | 私費 | 国費 | 政府 | 私費 | |
| 1979 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 | 2 | 0 | 2 |
| 1980 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 | 4 | 0 | 4 |
| 1981 | 0 | 5 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 5 | 0 | 5 |
| 1982 | 0 | 6 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 | 0 | 1 | 7 | 0 | 8 |
| 1983 | 0 | 6 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 0 | 1 | 8 | 0 | 9 |
| 1984 | 0 | 4 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 | 0 | 1 | 7 | 1 | 9 |
| 1985 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 3 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4 | 0 | 0 | 5 | 3 | 8 |
| 1986 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 | 3 | 0 | 2 | 4 | 1 | 7 |
| 1987 | 0 | 0 | 0 | 3 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 | 3 | 1 | 2 | 6 |
| 1988 | 0 | 0 | 0 | 5 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 5 | 0 | 1 | 10 | 0 | 1 | 11 |
| 1989 | 0 | 2 | 0 | 11 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 3 | 0 | 12 | 5 | 0 | 17 |
| 1990 | 0 | 4 | 0 | 14 | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 | 3 | 2 | 3 | 19 | 6 | 3 | 28 |
| 1991 | 0 | 5 | 0 | 11 | 0 | 1 | 5 | 0 | 0 | 1 | 0 | 3 | 17 | 5 | 4 | 26 |
| 1992 | 0 | 5 | 0 | 8 | 2 | 5 | 9 | 0 | 4 | 1 | 0 | 2 | 18 | 7 | 11 | 36 |
| 1993 | 0 | 3 | 0 | 7 | 5 | 9 | 11 | 0 | 5 | 5 | 0 | 0 | 23 | 8 | 14 | 45 |
| 1994 | 0 | 2 | 1 | 12 | 4 | 8 | 12 | 0 | 6 | 3 | 0 | 1 | 27 | 6 | 16 | 49 |
| 1995 | 0 | 3 | 2 | 8 | 1 | 8 | 14 | 0 | 5 | 3 | 0 | 1 | 25 | 4 | 16 | 45 |
| 1996 | 0 | 5 | 5 | 5 | 1 | 5 | 14 | 0 | 4 | 9 | 0 | 4 | 28 | 6 | 18 | 52 |
| 1997 | 0 | 11 | 5 | 12 | 0 | 3 | 15 | 0 | 2 | 0 | 0 | 4 | 27 | 11 | 14 | 52 |
| 1998 | 0 | 14 | 4 | 12 | 0 | 3 | 11 | 0 | 4 | 2 | 0 | 4 | 25 | 14 | 15 | 54 |
| 1999 | 0 | 14 | 2 | 9 | 0 | 2 | 13 | 0 | 6 | 3 | 0 | 4 | 25 | 14 | 14 | 53 |
| 2000 | 0 | 13 | 2 | 10 | 1 | 7 | 12 | 0 | 3 | 3 | 0 | 3 | 25 | 14 | 15 | 54 |
| 2001 | 0 | 12 | 3 | 5 | 1 | 11 | 18 | 0 | 3 | 1 | 0 | 1 | 24 | 13 | 18 | 55 |
| 2002 | 1 | 10 | 3 | 2 | 0 | 10 | 14 | 1 | 8 | 1 | 0 | 2 | 18 | 11 | 23 | 52 |
| 2003 | 1 | 9 | 7 | 2 | 0 | 13 | 17 | 0 | 7 | 0 | 0 | 4 | 20 | 9 | 31 | 60 |
| 2004 | 0 | 9 | 5 | 2 | 0 | 17 | 12 | 0 | 7 | 0 | 0 | 5 | 14 | 9 | 34 | 57 |
| 2005 | 0 | 12 | 7 | 2 | 1 | 14 | 9 | 0 | 5 | 0 | 0 | 2 | 11 | 13 | 28 | 52 |
| 2006 | 0 | 13 | 9 | 2 | 1 | 10 | 5 | 0 | 4 | 0 | 0 | 1 | 7 | 14 | 24 | 45 |
| 2007 | 1 | 16 | 8 | 1 | 0 | 6 | 4 | 0 | 5 | 1 | 0 | 5 | 7 | 16 | 24 | 47 |
| 2008 | 1 | 25 | 10 | 1 | 0 | 9 | 3 | 2 | 5 | 0 | 0 | 18 | 5 | 27 | 42 | 74 |
| 2009 | 0 | 29 | 11 | 1 | 1 | 19 | 3 | 3 | 10 | 0 | 1 | 22 | 4 | 34 | 62 | 100 |
| 2010 | 0 | 34 | 12 | 0 | 1 | 20 | 4 | 3 | 16 | 0 | 0 | 18 | 4 | 38 | 66 | 108 |
| 2011 | 1 | 34 | 11 | 1 | 0 | 12 | 2 | 3 | 23 | 0 | 0 | 19 | 4 | 37 | 65 | 106 |

グラフ1 留学生数(年度別)集計(各年5月1日現在)

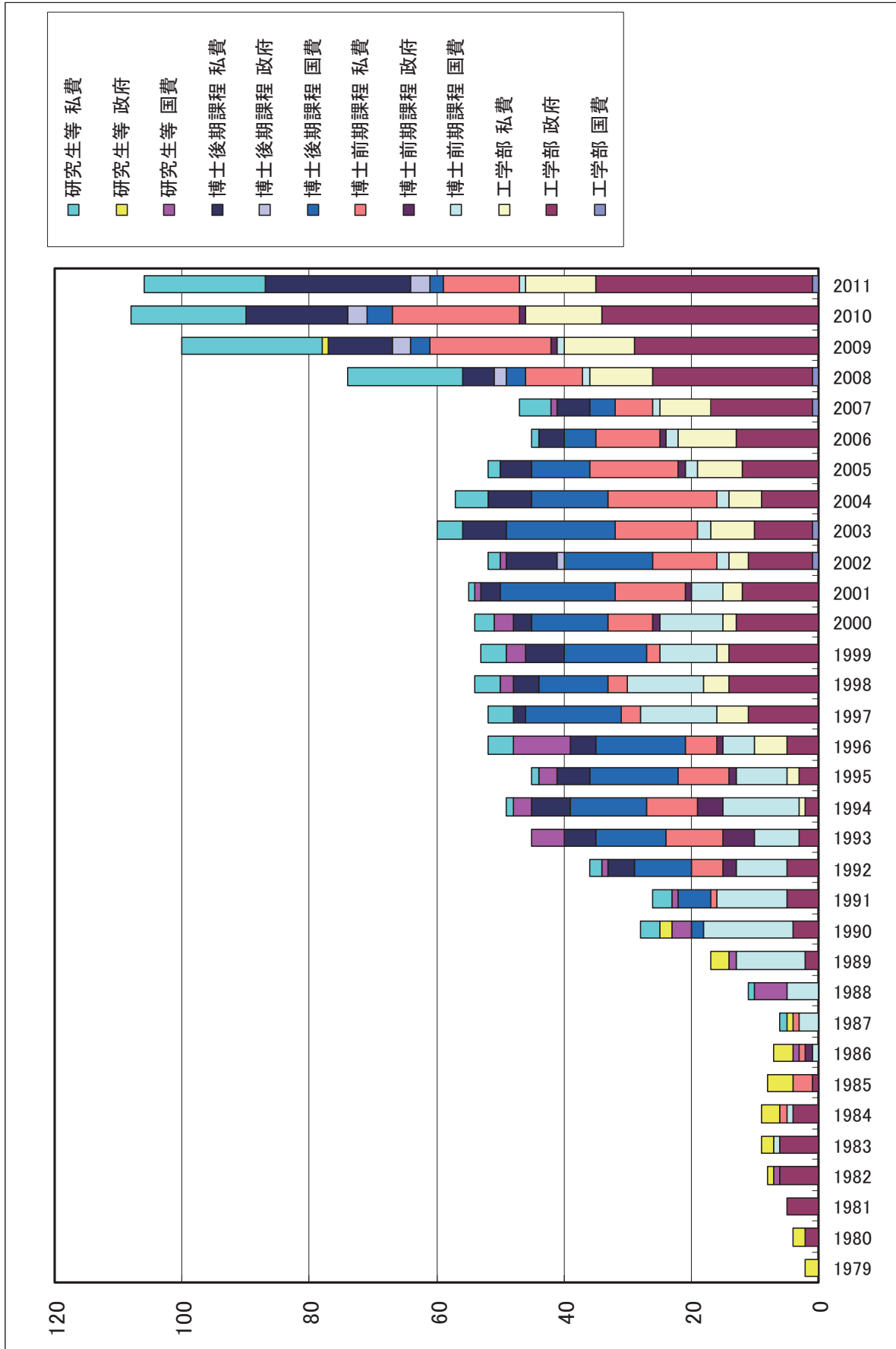


表2 留学生数(学科・学年別)集計(2011年5月1日現在)

【学部】

| 学 科 名 | 1 年 | 2 年 | 3 年 | 4 年 | 合 計 |
|-----------|-----|-----|-----|-----|-----|
| 建設システム工学科 | | | | 1 | 1 |
| 機械システム工学科 | | | | 8 | 8 |
| 情報工学科 | | | | 2 | 2 |
| 電気電子工学科 | | | | 6 | 6 |
| 材料物性工学科 | | | | 0 | 0 |
| 応用化学科 | | | | 2 | 2 |
| 建築社会基盤系学科 | 2 | 2 | 1 | | 5 |
| 機械航空創造系学科 | 6 | 4 | 5 | | 15 |
| 応用理化学系学科 | 0 | 0 | 0 | | 0 |
| 情報電子工学系学科 | 1 | 2 | 4 | | 7 |
| 合 計 | 9 | 8 | 10 | 19 | 46 |

【博士前期課程】

| 専 攻 名 | 1年 | 2年 | 合 計 |
|--------------|----|----|-----|
| 建築社会基盤系専攻 | 1 | 0 | 1 |
| 公共システム工学専攻 | 0 | 1 | 1 |
| 機械創造工学系専攻 | 1 | 1 | 2 |
| 航空宇宙システム工学専攻 | 0 | 0 | 0 |
| 応用理化学系専攻 | 1 | 1 | 2 |
| 情報電子工学系専攻 | 3 | 4 | 7 |
| 数理システム工学専攻 | 0 | 0 | 0 |
| 合 計 | 6 | 7 | 13 |

【博士後期課程】

| 専攻名 | 1年 | 2年 | 3年 | 合計 |
|--------------|----|----|----|----|
| 建設工学専攻 | | | 5 | 5 |
| 生産情報システム工学専攻 | | | 0 | 0 |
| 物質工学専攻 | | | 3 | 3 |
| 創成機能科学専攻 | | | 2 | 2 |
| 建設環境工学専攻 | 3 | 1 | 0 | 4 |
| 生産情報システム工学専攻 | 1 | 3 | 1 | 5 |
| 航空宇宙システム工学専攻 | 0 | 0 | 1 | 1 |
| 物質工学専攻 | 3 | 3 | 0 | 6 |
| 創成機能工学専攻 | 1 | 1 | 0 | 2 |
| 合 計 | 8 | 8 | 12 | 28 |

【その他】

| | |
|--------|----|
| 研究生 | 4 |
| 科目等履修生 | 0 |
| 特別研究学生 | 6 |
| 特別聴講学生 | 9 |
| 合 計 | 19 |

表3 留学生数(国・身分別)集計(2011年5月1日現在)

| 国名 | 学部 | | | 博士前期課程 | | | 博士後期課程 | | | 研究生等 | | | 合計 | | |
|--------|----|----|----|--------|----|----|--------|----|----|------|----|----|----|----|----|
| | 国費 | 政府 | 私費 | 国費 | 政府 | 私費 | 国費 | 政府 | 私費 | 国費 | 政府 | 私費 | 国費 | 政府 | 私費 |
| 中国 | 0 | 0 | 7 | 1 | 0 | 8 | 1 | 0 | 17 | 0 | 0 | 8 | 2 | 0 | 40 |
| マレーシア | 0 | 34 | 3 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 35 | 5 |
| 韓国 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 8 | 0 | 0 | 9 |
| ラオス | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 | 3 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 4 |
| タイ | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 | 3 |
| インドネシア | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 |
| エジプト | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 0 |
| パキスタン | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| フィリピン | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| イラン | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| 合 計 | 1 | 34 | 11 | 1 | 0 | 12 | 2 | 3 | 23 | 0 | 0 | 19 | 4 | 37 | 65 |

6.3 奨学金

私費外国人留学生の奨学金受給状況は表4のとおりであり、私費留学生の82%が奨学金を受給している。

表4 各種奨学金の受給(身分別)状況(2010年10月1日現在)

| 奨学金名 | 学部 (11) | 博士前期課程 (19) | 博士後期課程 (22) | 研究生 (2) | 特別 研究生 (8) | 特別聴 講学生 (8) | 科目等 履修生 (1) | 合計 (71) |
|---|------------|----------------|----------------|------------|------------------|-------------------|-------------------|------------|
| 室蘭工業大学私費外国人留学生 支援奨学金(月額50,000円) | | 5 | 9 | | | | | 14 |
| 室蘭工業大学私費外国人留学生 支援奨学金(月額30,000円) | 1 | 5 | 5 | | | | | 11 |
| 室蘭工業大学私費外国人留学生 支援奨学金(月額5,000円) | 2 | | | | | | | 2 |
| 室蘭工業大学短期留学生(受入) 奨学金(月額50,000円) | | | | | 2 | | | 2 |
| 日本学生支援機構短期留学推薦制度 (受入)奨学金(月額80,000円) | | | | | 3 | | | 3 |
| 日本学生支援機構 21世紀東アジア大 交流(受入)奨学金(月額80,000円) | | | | | | 7 | | 7 |
| 日本学生支援機構私費外国人留学生 学習奨励費(大学院:月額65,000 円, 学部:月額48,000円) | 4 | 5 | | | | | | 9 |
| 日本国際教育支援協会一般奨学金 (月額30,000円) | | | 1 | | | | | 1 |
| 北海道外国人留学生国際交流支援事 業助成金(月額20,000円) | | 1 | 1 | 1 | | | | 3 |
| 財団法人ロータリー米山記念奨学会 奨学金(月額140,000円) | 1 | 1 | | | | | | 2 |
| 財団法人佐川留学生奨学会奨学金 (月額100,000円) | 1 | | | | | | | 1 |
| 財団法人日揮・実吉奨学会奨学金 (年額250,000円) | | 1 | 1 | | | | | 2 |
| 財団法人平和中島財団奨学金 (月額120,000円) | | 2 | | | | | | 2 |
| 共立国際交流奨学財団奨学金 (月額60,000円) | 1 | | | | | | | 1 |
| JICA奨学金 (月額170,000円) | | | 1 | | | | | 1 |
| 財団法人日立国際奨学財団奨学金 (月額180,000円) | | | 1 | | | | | 1 |
| 合計 | 10 | 20 | 19 | 1 | 5 | 7 | 0 | 62 |

注1 実受給者数は58名である。

注2 上段()は私費外国人留学生数である。

6.4 留学生用宿舎

留学生用宿舎は次のとおりである。

- (1) 留学生宿舎 : 個室, 12室 (入居期間1年)
- (2) 留学生アパート : 2名入居, 9室 (入居期間1年)
- (3) 明德寮 : 3名入居, 16室

この他に本学の宿舎ではないが, 市営アパート25室を留学生用の宿舎として確保している。

留学生宿舎



外観



廊下

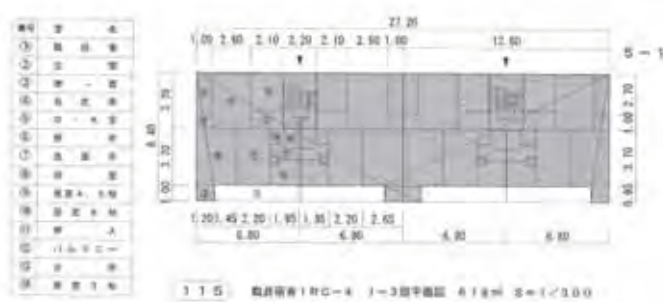


個室

留学生アパート



外観



個室

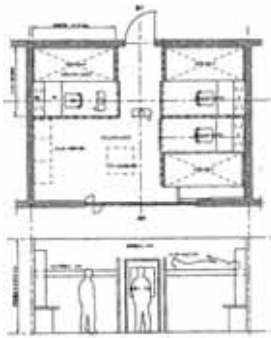


台所

明德寮 A棟4階



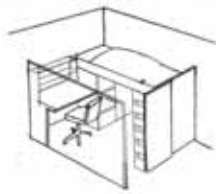
外観



個室ブース



補食室 (各階共同)



浴室 (共同)



洗濯室 (共同)

市営アパート (水元団地)



外観



和室



台所

7. 国際交流センター教員が担当した講義

7.1 国際交流センター教員担当講義一覧

国際交流センター教員が 2010 年度に担当した講義は以下のとおりである。

| 2010 年度前期 | 2010 年度後期 |
|---|---|
| 日本語補講 日本語初級 I 学部・大学院 日本語科目 日本語 A1 (初級～中級) 日本語 B1 (中級) 日本語 C1 (中級～上級) 日本語 D1 (日本語能力試験対策) 学部・大学院 共通科目 海外語学研修 ^{注1} 新冠農業実習(社会体験実習) | 日本語補講 日本語初級 I A 日本語初級 I B 日本語初級 II 学部・大学院 日本語科目 日本語 A2 (初級～中級) 日本語 B2 (中級) 日本語 C2 (中級～上級) 日本語 D2 (日本語能力試験対策) 学部・大学院 共通科目 異文化交流 A ^{注2} 大学院 共通科目 国際関係論特論 |

注1 海外語学研修については第 11 章に述べる

注2 異文化交流 B(前期開講)は全学共通教育センター クラウゼ・オノ教員が担当

7.1 日本語補講

大学院から日本へ留学する学生、および本学協定校からの交換留学生は、日本語学習経験が少ない、あるいはまったくない場合が多い。国際交流センターでは、そうした留学生を対象に、日本語補講(単位とならない)を開講している。2010年度に実施した補講は以下のとおりである。

(1) 日本語初級 I (前期)

担当:高久裕子(非常勤講師)

時間数:4.5 時間(3 回)／週

受講者数:11 名

使用教材:『みんなの日本語 初級 I 』

(2) 日本語初級 I A(後期)

担当:山路奈保子

時間数:4.5 時間(3 回)／週

受講者数:6名

使用教材:『日本語初級 I 大地』

日本語初級 I B(後期)

担当:山路奈保子

時間数:1.5 時間(1回)／週

受講者数:3名

使用教材:『Now You' re Talking! Japanese Conversation for Beginners』

(3) 日本語初級 II (後期)

担当:高久裕子(非常勤講師)
使用教材:『みんなの日本語 初級 I』

時間数:4.5 時間(3 回)／週
受講者数:8 名

後期の日本語 I を A と B に分けたのは、中東・ヨーロッパからの留学生・インターンシップ研修生より「日本語学習のためにじゅうぶんな時間が取れないため、文字を学習せず簡単な日常会話のみ習得したい」という希望があったことに対応して、「読み・書きを含め総合的に学習するコース(A)」と「ローマ字を使用して会話のみ学習するコース(B)」に分けたものである。

7.2 学部・大学院 日本語科目

正規の日本語科目は、前期・後期それぞれレベル別に A～D までの 4 科目が開講された。開講前にプレースメントテストを行い、その結果をもとに科目選択のアドバイスをを行ったが、どの科目を履修するかは基本的に学生の自由とした。

(1) 日本語 A1(前期)

担当:山路奈保子
レベル:初級～初中級
使用教材:『聞く・考える・話す 留学生のための日本語会話』ほか
時間数:1.5 時間(1 回)／週
受講者数:15 名
内容:初級で習得した文型を身近な会話の中で運用できるようになることをめざし、大学生活の中で遭遇する可能性の高い場面設定でロールプレイなどを用いた会話練習を行った。

(2) 日本語 A2(後期)

担当:山路奈保子
レベル:初中級
使用教材:『中級へ行こう』
時間数:1.5 時間(1 回)／週
受講者数:12 名
内容:初級で習得した文型の定着をはかるとともに、日常生活で用いられる範囲の中級レベル文法も取り入れ、ある程度社会性のある話題についての平易な文章を読んだり書いたりする練習を行った。

(3) 日本語 B1(前期)

担当:山路奈保子
レベル:中級
使用教材:『読解をはじめのあなたへ』『初級文型で学ぶ科学技術の日本語』ほか
時間数:1.5 時間(1 回)／週
受講者数:25 名
内容:科学技術分野にかかわるテーマの文章や、メールなど実用的な文章を用いて、複雑な内容を含む文章への読解力と基礎的な文型を用いた文章表現力の育成を目指す読解・作文練習を行った。

(4) 日本語 B2(後期)

担当:山路奈保子
レベル:中級
使用教材:『日本語を書くトレーニング』『日本語生中継 初中級編』ほか、オリジナル教材
時間数:1.5 時間(1 回)／週
受講者数:17 名
内容:「ことばでつくられる人間関係」をテーマに、日本語話者が人間関係の維持のためにどのような表現を用い、何を言って何を言わないようにしているかなどについて、会話やメールの

文章などを通じて観察・考察を行った。

(5) 日本語 C1(前期)

担当: 門沢健也

時間数: 1.5時間(1回)／週

レベル: 上級

受講者数: 18名

授業内容: なまの新聞記事を教材として、実際の情報伝達、ジャーナリズムで使われるような、高度でかつ正式な日本語表現の理解読解の訓練を行った。また、それぞれのトピックに関する時事問題や日本の文化・習慣・歴史・生活用語などについて解説した。

(6) 日本語 C2(後期)

担当: 門沢健也

時間数: 1.5時間(1回)／週

レベル: 上級

受講者数: 12名

授業内容: 上記の前期の授業を継続する形で、新聞記事の読解を行った。

(7) 日本語 D1(前期)

担当: 門沢健也

時間数: 1.5時間(1回)／週

レベル: 上級

受講者数: 5名

授業内容: 前年度からこれまでの日本語能力試験(最上級レベルが1級で4級まで分かれる)の実施内容・方法・レベルが変更されて、最上級の N1から N5までの5段階で試験が行なわれるようになったことを受けて、N1とN2の試験を受験したい、あるいはそのレベルの日本語を学習したい学生を対象に、その準備のための主として高度な文法・語彙について練習した。

(8) 日本語 D2(後期)

担当: 門沢健也

時間数: 1.5時間(1回)／週

レベル: 上級

受講者数: 5名

授業内容: 上記の前期の授業を継続する形で、日本語能力試験 N1, N2のレベルの受験のための勉強をした。実際に1人の学生が、本学で初めて N1 の試験を受験して、合格することができた。

日本語科目全体として、時間的・人力的制約によりひとつのレベルの授業が週に一度しか行われないのが実情であるが、多くの留学生、とりわけ日本語学校等を経ずに直接入学する研究生や大学院生にとって、週一度の授業では不足と感じられるようであり、単位が取れる・取れないにかかわらずレベルの異なる複数の日本語科目を並行して履修する学生が多かった。その結果として、想定するレベルよりもはるかに幅広いレベルの学生がひとつの教室で学ぶという状況となった。こうした状況に対応し講義内容のさらなる改善を行っていくことが今後の課題である。

7.3 学部・大学院共通科目

(1) 異文化交流

担当: 門沢健也

時間数: 1.5時間(1回)／週

受講者数: 24名

日本語教員の担当科目の中で、「異文化交流A」は、カリキュラム上の位置付けは留学生だけのための日本語科目ではないが、日本人学生と留学生が共同して学ぶこと自体を目的とした、特色ある科目である。今年は留学生12人と日本人学生12人ずつ、合計24人を受講人数の上限と

し、受講者が興味のあるテーマを自分たちで設定し、留学生と日本人を含む小グループで、そのテーマについて事前に調べ、授業で発表し、その後全体で討論を行う、という授業である。今年の実践者は、留学生13人、日本人学生11名の合計24人でおこなった。

これまでに受講者が選んだテーマの例をいくつか挙げると、「各国の教育事情・就職事情」、「死刑・脳死臓器移植・安楽死の是非」、「各国の恋愛・結婚事情」、「各国の食文化の違い」、「各国・各文化によるルールやマナー、礼儀などに関する寛容さ・厳しさの違い」、「各国の学生の男女交際」など多岐に亘り、受講した学生の満足度も高いと感じている。特に今年度は、受講した学生のモチベーションが非常に高く、活発でしかも楽しい討論が繰り広げられた。特に日本人学生の意見発表・プレゼンテーションの意欲・能力の向上に非常に寄与していると感じた。



(2) 新冠農業実習（社会体験実習）

国際交流センター自体の所轄ではないが、国際交流センターの専任教員が発案し実施を担当している、本学の特色ある実習科目の一つに、「新冠農業実習」がある。

工学を志し、工学を学び、そして多くは工学を生涯のなりわいと為す、という工業大学の学生たちに、ちょっと視点を変えて農業を体験させるのはどうだろうか。それが新たな自己を発見したり新しい価値観や職業観をはぐくむ契機となり、人生を豊かにしたり生きるための力を与えてくれるのではないだろうか。—そんな発想から、2001（平成13）年度から、日高管内新冠（にかっぶ）町の篤農家グループの協力を得て、同地域での農業実習を正規の科目として導入した。この新冠農業実習は、毎年10～20人の学生を新冠町の水田・畑作・酪農・肉牛・軽種馬・養鶏などの農家に分けて10日間寄宿させ、家族の一員として生活をともにしながら、農作業や農家の生活を体験させようというもので、参加した学生には「社会体験実習」の2単位が与えられる。

参加した学生たちは、10日間の実習で、日ごろ慣れないきつい労働を経験して、疲れや筋肉痛を訴えながらも、恒例の実習最後の閉講式では、「食糧生産の大切さとその現場の苦労を知った」「農家の人々の明るさとエネルギーから元気をもらった」「農業の中で工業技術がどのように求められているかを身をもって知ることができた」などの感想を力強く述べる。

2010年度の第9回まででこの実習に参加した学生は161人に達し、2009年からは国内の提携大学である東京都市大学の学生にも参加の門戸を開放し、また留学生の参加も増えるなど、学生たちにとって、異業種・異文化・異世代、そして国際交流のまたとない機会となっている。

特に今年度の特徴は、参加学生12名のうち10名が女子学生であったこと、4名の留学生が参加したことであり、女子学生の積極性と、大学と地域の交流に加えて、地域の国際交流にも貢献することができたのと、留学生に貴重な日本理解の機会を与えることができたと感じている。

また、前年度の2010年2月には、これまでの実習参加学生の自主的な発案で室蘭工大と新冠町の交流10年の節目を祝賀する記念式典と、新冠町で行った。これまでの参加学生（卒業生）受入れ農家とその家族、新冠町の関係者、本学の首脳・関係教員など100名以上が参加する盛大な会となり、その後の懇親会も大いに盛り上がった。

企画した学生グループのこの活動に対し、2010年3月、室蘭工大の学生の社会活動を顕彰する「蘭岳賞」が与えられて表彰を受けた。



7.4 大学院共通科目

(1) 国際関係論特論

担当：山路奈保子，門澤健也

受講者数：9名（博士前期課程1年。うち留学生1名を含む）

内容：「国境を越えて移動する個人と受け入れ社会との出会い」を大きなテーマに、日本や諸外国の移民事情や移民政策、日本における外国人／外国における日本人の異文化適応、イスラーム文化など毎回異なるテーマを取り上げ、講義と意見交換を行った。国際交流センター教員2名が講義を担当したほか、学内外の教員や学生を講師役に迎え、異なる視点からのさまざまな考え方に触れる機会を設けた。

8. 室蘭工業大学国際セミナー

開催日:2010年11月4日(木)

参加人数:約80名(市民, 学生, 教職員を含む)

テーマ:室工大国際交流センタースタッフに聞く
「つながる!いきる!海外活動経験」

- トルコ滞在記 ～アジアの西の端っこで～
山路 奈保子 (准教授 日本語教育担当)
- Viva! ブラジル ～21世紀のフロンティア～
内藤 直子 (事務補佐員)

同セミナーは, 大学の内外を問わず広く市民の皆さんとともに, 世界のさまざまな国や地域について勉強し合い, 国際的な視野を広げることを目的としている。



山路奈保子による講演



内藤直子による講演



講演会の様子

9. 留学生を対象とした行事、研修等

9.1 国際交流センター主催行事

(1) 留学生オリエンテーション及び新入学留学生歓迎交流会

開催日：2010年5月7日

参加人数：約150名（チューター、教職員を含む）

新たな留学生に対して留学生関係教職員の紹介を行い、日本での生活上の注意事項を説明した。同時に在籍中の留学生及びチューターを紹介し、その後新入学留学生歓迎交流会を行った。



オリエンテーション風景



交流会、各国の料理が並ぶ

(2) 外国人留学生等見学旅行

開催日：2010年9月28～30日

参加人数：48名（留学生家族、教職員を含む）

北海道内の自然や特有の産業施設等の見学を通じて、留学生が北海道の文化、歴史、産業等についての知識や理解を深めることを目的として、今年度は函館方面へ2泊3日の日程で実施した。

《日程》

| | |
|------|---|
| 9/28 | 工大～湯ノ川稜雲亭（昼食）～函館どつく株式会社～函館山（夜景見学）～ホテル（泊）（ホテルグランティア函館駅前） |
| 9/29 | ホテル～株式会社 布目（工場見学）～函館国際ホテル（昼食）～函館元町地区町並み＜北海道遺産＞～旧函館区公会堂＜重要文化財＞～八幡坂～二十間坂～東本願寺函館別院＜本堂、正門：重要文化財＞～ホテル（泊） |
| 9/30 | ホテル～五稜郭＜北海道遺産＞～箱館奉行所～五稜郭タワー～旬菜食健 ひな野（昼食）～昆布館～噴火湾パノラマパーク～豊浦噴火湾 PA～工大 |



五稜郭にて



株式会社布目を見学

(3) 10月新入学留学生歓迎会

開催日：2010年10月14日

参加人数：22名（チューター、教職員を含む）

10月に新しく来日した留学生、インターンシップ生が早く本学での生活に馴染めるよう、歓迎会を開催し、留学生同士、国際交流センター教職員との交流を図った。



10月に来日した留学生



山路教員から生活アドバイス

(4) 室蘭岳登山

開催日：2010年10月30日

参加人数：28名（チューター、教職員を含む）

室蘭岳（標高911メートル）登山を実施し、10月に来日した新しい留学生を含む28名が参加した。



秋晴れの山頂にて



ロッジの前で

(5) 野外セミナー（スキー研修）

開催日：2011年1月7日

参加人数：70名（留学生家族を含む）

場所：サンライバスキー場

南国出身が多く、冬期間部屋に閉じこもりがちな留学生に対して、北国の冬期間の楽しみ方を紹介した。



初心者もあっという間に上達



今年はいにくのお天気だけど



みんなスキーを満喫しました

(6) 冬道運転講習会

開催日：2011年2月21～24日

留学生参加人数：8名

自動車を所有する留学生を対象に冬道運転講習会開催した。雪国での生活経験のない留学生が多いため、圧雪やアイスバーンといった冬道の特徴について細かく説明し、危険回避のためのハンドルやブレーキ操作の方法を指導した。



冬道の特徴を図解して説明



いざ、体験実習！

(7) 留学生交流会

開催日：2011年2月25日

参加人数：約250名（留学生家族を含む。）

場所：蓬峯殿

日頃留学生がお世話になっている市内等の国際交流推進関係諸団体及び市民等を招待し、交流会を通して留学生との親睦を図るとともに、卒業・修了する留学生を祝福することを目的として開催している。



卒業生の挨拶



留学生によるアトラクション



佐藤学長夫妻と留学生



学長夫妻、卒業生を中心に、留学生とその家族が全員集合！

(8) 着物着付け体験・お別れ会

開催日：2011年3月12日

留学生参加人数：12名

装道礼法着物学院の協力を得て、卒業する学生に着物の着付け体験会を実施した。



ただいま変身中



凛々しい袴姿



着物学院の方々と

9.2 学外の諸行事への留学生派遣、参加の状況

9.2.1 留学生派遣行事

| 開催日 | 主催 | 行事名 | 留学生派遣人数 |
|-----------------|------------------------|----------------------------|---------|
| 2010年 4月 15日 | 長沼ロータリークラブ | 長沼国際交流フェスティバル | 9 |
| 2010年 7月 3日 | 室蘭東ロータリークラブ | イタンキ浜清掃 | 6 |
| 2010年 7月 7日 | 本室蘭小学校 | 国際交流教室 | 1 |
| 2010年 7月 15日 | 絵鞆小学校 | 国際交流教室 | 1 |
| 2010年 8月 26日 | 北海道登別洞爺広域観光圏協議会 | 中国人誘客戦略にかかわる 意見交換会 | 4 |
| 2010年 10月 27日 | 本輪西小学校 | 国際交流教室 | 2 |
| 2010年 11月 19日 | 嵐山の会 | 国際交流懇談会 | 1 |
| 2010年 11月 19日 | 天沢小学校 | 4年社会科見学 | 3 |
| 2010年 12月 2日 | 絵鞆小学校 | 国際交流教室 | 2 |
| 2010年 12月 14日 | 八丁平小学校 | 国際交流教室 | 3 |
| 2011年 2月 9日 | 桜が丘小学校 | 国際交流教室 | 1 |
| 2010年 12月 16日 | 室蘭ロータリークラブ | 室蘭ロータリークラブ例会 | 4 |
| 2011年 1月 12～22日 | NTT 東日本室蘭支店/ ニイハオ基金 | カレンダーリサイクル市手伝い | 15 |
| 2011年 2月 19日 | 室蘭ルネサンス | 交流懇談会 | 1 |
| 2011年 2月 24日 | 室蘭開発建設部地域振興対策室 | 胆振・日高地域農水産品 海外輸出支援調査試食会 | 50 |
| 2011年 1～3月 | 室蘭社会福祉協議会 | 雪かきボランティア | 5 |
| 合計 | | | 113 |



天沢小学校の児童と交流



試食会で胆振日高の味に触れる

9.2.2 学外支援団体等支援行事

| 開催日 | 主催 | 行事名 | 留学生 参加人数 |
|-------------------|-----------------|------------------------|-------------|
| 2010年 7月 10日 | 噴火湾海洋動物観察協会 | イルカ・鯨ウォッチング | 50 |
| 2010年 7月 24日 | むろらん港まつり実行委員会 | むろらん港まつり 「総参加市民おどり」 | 38 |
| 2010年 7月 31～8月 1日 | のぼりべつ元鬼まつり実行委員会 | のぼりべつ元鬼まつり | 4 |
| 2010年 8月 6～8日 | 日本学生支援機構/育英友の会 | 留学生・奨学生地域交流会 | 4 |
| 2010年 11月 19日 | 札幌商工会議所、他 | アジアン・ブリッジ・フェス 2010 | 12 |
| 2010年 2月 11日 | 室蘭市国際交流推進協議会 | 雪まつりバスツアー | 40 |
| 2011年 2月 26日 | 室蘭国際交流センター | さよなら着物パーティー | 12 |
| 2011年 3月 23日 | 装道礼法着物学院 | 女子学生に袴の着付け（卒業式） | 5 |
| 合 計 | | | 165 |

(1) むろらん港まつり 「総参加市民おどり」

主催：むろらん港まつり実行委員会

開催日：2010年7月24日

参加人数：約38名

むろらん港まつりのイベントの1つである「総参加市民おどり」に多くの留学生が参加し、大学職員とともに室蘭ばやしや北海盆唄の盆踊りを踊りながら、日本の祭りを楽しんだ。



浴衣と半被で勢ぞろい



見事な盆踊りを披露



掛け声も威勢よく

(2) アジアン・ブリッジ・フェス 2010

主催： 経済産業省北海道経済産業局札幌商工会議所，(株)北海道チャイナワーク，
(株) パソナ パソナキャリアカンパニー

開催日：2010年11月19日

留学生参加人数：12名

場 所：札幌市 ACU (アキュ)

経済産業省が主催する「アジア人財資金構想」の留学生のための合同企業説明会で、道内外の32企業が参加して行われ、今年は12名の留学生が参加した。

(3) 雪まつりバスツアー

主催：室蘭市国際交流推進協議会

開催日：2011年2月11日

留学生参加人数：40名

毎年、雪まつり期間中の週末に開催されるバスツアーで、札幌市内と雪まつり会場を見学する。今年は、北海道大学総合博物館を見学した。



北海道大学総合博物館



サザエさんの雪像の前で



大通り公園会場

(4) さよなら着物パーティー

主催：室蘭国際交流センター

開催日：2011年2月26日

留学生参加人数：12名

卒業して室蘭を離れる留学生のために室蘭国際交流センターが毎年開催しているパーティーで、今年は12名が参加し、着物の着付け体験やゲームなどを楽しんだ。



着物を着了た留学生達



全員で記念撮影



手作りの料理でお別れ会

10. 学術交流協定校との交流

10.1 協定校等への訪問

(1) タイ 泰日工業大学，キングモンクット工科大学ラカバン校，チェンマイ大学，
訪問先：泰日工業大学，キングモンクット工科大学ラカバン校，泰日経済技術振興会
チャンマイ大学

訪問日程：7月20日から7月25日

訪問者：理事・国際交流センター長 野口 徹

しくみ情報系領域教授 酒井 彰

もの創造系領域准教授 寺本 孝司

国際交流センタースタッフ 成瀬 拓矢

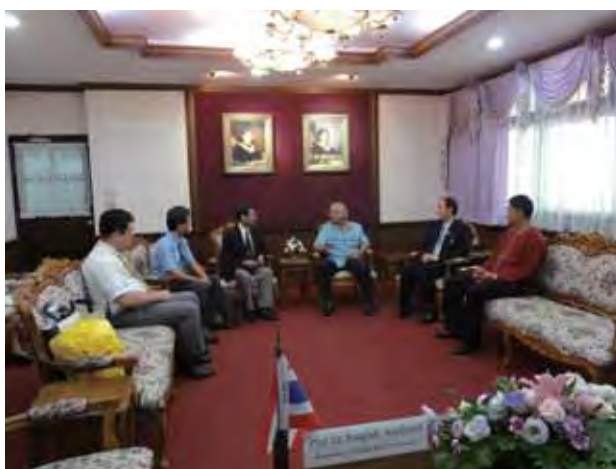
訪問内容：泰日工業大学・キングモンクット工科大学ラカバン校・チャンマイ大学へ
交流協定調印及び交流内容の協議



泰日工業大学にて Krisada 学長ほかと



キングモンクット大学にて Ruttikorn 副学長ほかと



チェンマイ大学にて Jakkapan 副学長ほかと

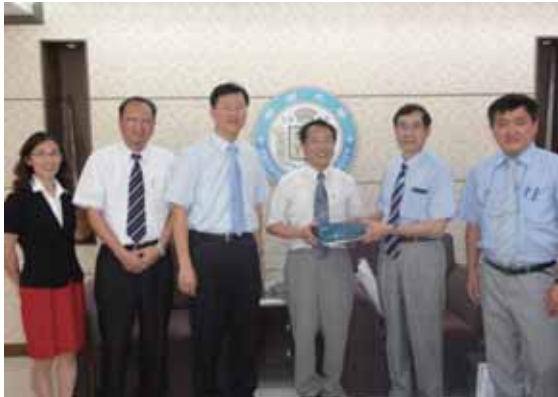
(2) 台湾 静宜大学, 大葉大学

訪問先：静宜大学, 大葉大学

訪問日程：8月2日, 3日

訪問者：理事・国際交流センター長 野口 徹
国際交流センター准教授 門澤 健也
国際交流センター准教授 山路 奈保子

訪問内容：台湾の静宜大学・大葉大学へ視察



静宜大学にて唐校長ほかと



大葉大学にて何校長ほかと

(3) タイ キングモンクット工科大学ラカバン校

訪問先：キングモンクット工科大学ラカバン校

訪問日程：8月24日, 25日

訪問者：副学長 空閑 良壽
地域連携推進課スタッフ 岩尾 有衣子

訪問内容：キングモンクット工科大学ラカバン校50周年記念式典出席



式典での会談



キングモンクット工科大学にて

(4) タイ チェンマイ大学

訪問先：チェンマイ大学

訪問日程：11月22日，11月23日

訪問者：教員 8名

大学院博士後期課程 2名

大学院博士前期課程学生 8名

研究生 1名

訪問内容：チェンマイ大学との合同シンポジウム (TJIEME-CMU-NuroranIT-2010)



シンポジウムでの本学学生の発表



チェンマイ大学関係者と

(5) 中国 中国留学生同窓会

訪問先：鄭州

訪問日程：10月23日，10月24日

訪問者：国際交流センター准教授 門澤 健也

国際交流センター准教授 山路 奈保子

国際交流センターグループマネージャー 塩崎泰子

訪問内容：中国留学生同窓会発足に伴う総会出席



中国留学生同窓会成立を記念して



成立総会の様子

10.2 外国，協定校等からの訪問受け入れ

(1) ロシア・極東工科大学本学訪問

訪問日程：10月14日から10月16日

訪問者：極東工科大学学長 FATKULIN ANVIR 教授

極東工科大学副学長 BELOV ALEXEY 教授

極東工科大学 YACHIN SERGEY 教授

極東工科大学副学長代理 SELIVANOVA TATIANA 教授

極東工科大学 KARASTELEV BORIS 氏

訪問内容：10月14日 新千歳空港出迎え

10月15日 総会

データベース構築に関する協力関係について

学生交流に関する覚書について

共同研究の将来構想について

次回の総会について

10月16日 本学視察，シップリサイクル見学



極東工科大学からの訪問団と本学スタッフ



Fatklin 学長との記念品の交換

(2) ベトナム・21世紀東アジア青少年大交流計画ベトナム高校生訪日団

訪問日程：10月21日

訪問者：ベトナム人高校生 20名

ベトナム人高校生引率 2名

訪問内容：21世紀東アジア青少年大交流計画の一環としてベトナム高校生が来学し，見学



ベトナムからの高校生と本学学生



研究室，実験室の見学

11. 学生の海外への派遣

11.1 短期留学

- (1) 学生氏名： 瀬野 耕一
所属： 情報工学科 4年
派遣先： 蘇州大学（中国）
期間： 1年間（2009年9月～2010年8月）
経済支援： 日本学生支援機構短期留学支援奨学金 月額 8万円



前期最後の授業を終えて



クラスメートと歓談のひと時

- (2) 学生氏名： 太田 篤志
所属： 機械システム工学科 4年
派遣先： ミシュコルツ大学（ハンガリー）
期間： 半年（2010年9月～2011年3月）
経済支援： 日本学生支援機構短期留学支援奨学金 月額 8万円



お別れ会にて



ミシュコルツ市街を眺める

11.2 ロイヤルメルボルン工科大学 (RMIT) 語学研修

期間： 2010年9月8日～9月24日

内容： 海外学術交流協定提携校における英語研修，オーストラリア文化体験，
学生交流

参加者： 8名（男子5名，女子3名）

1. 河関憲志 航空宇宙システム工学専攻1年
2. 森 祐太 機械航空創造系学科3年
3. 太田健太郎 機械航空創造系学科1年
4. 高橋真智子 機械航空創造系学科1年
5. 吉 永康 情報電子工学系専攻1年
6. 伊藤大裕 情報電子工学系学科3年
7. コー ユエンシャン 情報電子工学系学3年
8. 戸田聡美 応用理化学系学科2年

引率： 門沢健也 ひと文化系領域准教授，国際交流センター専任教員



日本語・英語のバイリンガル合宿



やったー！ 修了証書をいただく

11.3 ヨーロッパ語学研修

期間： 2011年3月2日～3月20日

内容： 英語の語学研修，企業・博物館の見学，ヨーロッパの文化体験（訪問地：ドイツ，
スイス，フランス，チェコ）

参加者： 13名（男子8名，女子5名）

1. 中越 千尋 建築社会基盤系学科2年
2. 泉谷 沙織 建築社会基盤系学科2年
3. 遠藤 奨子 建築社会基盤系学科2年
4. 片倉 篤志 建築社会基盤系学科2年
5. 久保 若菜 建築社会基盤系学科2年
6. 中川 翔太 機械航空創造系学科2年

7. 山上 佳那 機械航空創造系学科 2年
8. 須藤 正人 機械航空創造系学科 2年
9. 立谷 大輔 機械航空創造系学科 2年
10. 伴 直人 機械航空創造系学科 2年
11. 寺門 晃一 応用理化学系学科 2年
12. 梅藤 優 情報電子工学系学科 2年
13. 吉田 令 情報電子工学系学科 1年

その他参加者：東京都市大学の学生8名（男子6名，女子2名）

※戦略的大学連携支援事業による

引率： クラウゼ=小野・マルギット ひと文化系領域准教授，国際交流委員

その他引率：東京都市大学の教員の1名



ベルリンにて国会議事堂を見学



Erfurt 市街にてトーマス先生を囲んで

11.4 佐藤矩康博士記念国際活動奨励賞

賞の由来と趣旨

本奨学賞は、医学博士で博士（工学）である佐藤矩康先生のご寄附によって、2009年に創設されました。本学在学中の学部及び大学院の学生が海外国際会議での論文発表、海外での研究プロジェクト参画、海外インターンシップなど、国際的な場で活動し、成果を上げることを支援し、奨励することを目的としています。

佐藤矩康先生は昭和2年、北海道富良野町に生まれ、北海道大学医学専門部を卒業後、医師、医学博士として医業に従事される傍ら、多年、刀剣考古学の研究に携わり、平成18年「X線CT法による上古刀のはばき構造の解析」によって室蘭工業大学から博士（工学）の学位(主査 桃野正教授)を授与されました。また長年、私的な奨学財団により学生生徒の就学を支援しておられます。

本奨学賞が、学生の皆さんの国際意識・国際能力の向上に繋がり、ひいては室蘭工業大学の教育研究の活性化にいささかでも寄与することを希望します。

佐藤矩康（さとう のりやす）博士 略歴

昭和 2年4月 北海道上富良野町生まれ
名寄小学校，名寄中学校を経て，
昭和 25年3月 北海道大学医学専門部卒業
昭和 25年4月 北海道立札幌医科大学内科学教室入局 医師
以後 日高門別町 町立病院内科医長，南幌町 町立病院院長 等を歴任
現在 信佑会吉田記念病院医師，聖愛会発寒中央病院医師
(財)日本美術刀剣保存協会評議員 札幌支部長，
NPO 法人 北海道地域文化保存振興協会 副理事長 などを歴任



佐藤矩康博士

本奨励金は、年2回募集し、8名程度に各10万円を授与する。

【2010年度前期受賞者】

- ・劉 群 坡（生産情報システム工学専攻1年）
- ・代 軍（生産情報システム工学専攻1年）
- ・坂 本 牧 葉（生産情報システム工学専攻1年）
- ・吉 田 嘉 晃（物質工学専攻3年）
- ・フタバラット ナウアス ドム マリホット ロマリ（物質工学専攻1年）
- ・ロンダン タムブン（物質工学専攻1年）
- ・道 下 智 裕（機械創造工学系専攻2年）
- ・渡 邊 貴 裕（機械創造工学系専攻1年）
- ・藤 原 賢 彰（機械創造工学系専攻1年）
- ・元 茂 朝 日（応用理化学系専攻1年）



【2010年度後期受賞者】

- ・李 麗（航空宇宙システム工学専攻2年）
- ・畠中 和明（航空宇宙システム工学専攻2年）
- ・アフィシャ アリアス（創成機能科学専攻3年）



11.5 国際体験報告会・海外インターンシップ説明会

開催日時：7月1日（木）

場 所：教育・研究3号館N棟 N209講義室

参加学生数：30名

講演者

①留学経験者報告

森田 拓愛（情報電子工学系専攻1年）

2009年9月～2010年1月 ハンガリー・ミシュコルツ大学に留学

秋葉 啓次郎（情報電子工学系専攻2年）

2009年2月～2010年1月 韓国・ソウル科学技術大学校に留学

②佐藤矩康博士記念国際活動奨励賞の受賞者報告

富澤 清貴（機械創造系専攻2年）

2009年8月～9月 中国・無錫でインターンシップ

寺門 吾郎（創成機能科学専攻2年）

2009年8月～9月 中国・上海で国際会議に出席・発表

代 鋼（創成機能科学専攻3年）

2009年9月 中国・焦作で国際シンポジウムに出席・発表

李 占涛（建設工学専攻3年）

2009年10月 韓国・水原で国際会議に出席・発表

③IAESTE・海外インターンシップ説明会

藤原 賢彰（機械創造系専攻1年）

2010年8月～9月 ハンガリー・ブタペストでインターンシップ

留学経験者と佐藤矩康博士記念国際活動奨励賞の受賞者の報告と海外インターンシップの面白さ、意義と効果を広くPRし、これを実施するIAESTE（国際学生技術研修協会）※の研修生募集試験への応募を勧誘する目的で、キャリアサポートセンターと共同で実施した。

※IAESTE（国際学生技術研修協会）

国際インターンシップを促進する非営利・非政府組織で、世界80カ国に支部（委員会）があり4,000社を超える企業とのネットワークがある。



講演者の国際体験を熱心に聴く学生



自らの国際体験を語る

12. 外国人研究員，外国人インターンシップ研修生受入れ

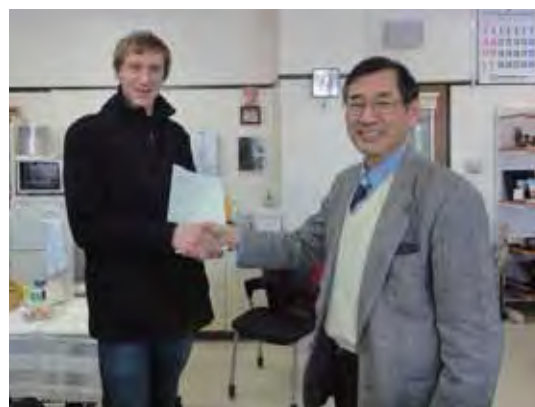
12.1 外国人インターンシップ研修生受入れ

インターンシップ研修生受入れ制度は，外国の大学の正規課程に在籍する外国人学生で，本学において実施する研究，実験，解析，設計，製作等の研修プログラムに参加することである。2010年度は下記のとおり 2名のインターンシップ研修生を受け入れた。

| 氏名 | 国 | 受入期間 | 受入教員 |
|--------------------|------|---------------------|------|
| Wesolowski Florian | フランス | 2010.10.4-2011.1.28 | 棚次宣弘 |
| Herb Vincent Marc | フランス | 2010.10.4-2011.1.28 | 棚次宣弘 |



インターンシップでの研修成果



フローリアン君への修了証書授与

12.2 外国人研究員受入れ

本学重点研究プロジェクト「希土類研究プロジェクト」の一環で，協定を締結しているニコラエフ無機化学研究所から 1名，ヨッヘ物理技術研究所から 1名の博士研究員を雇用し共同研究を行った。本プロジェクトは 2011 年度も継続し，引き続き 3名の博士研究員を雇用する予定である。

13. 国際交流クラブ

国際交流クラブは、本学の公認課外活動団体（学生サークル）で、1994年に、その当時の留学生（院生）数人が中心となり、自分たちより年若い日本人の学生たちに、親睦と交流を呼びかける形で発足した。

当時は留学生の数がまだ少なく、またほとんどが修士か博士の大学院生、また家族随伴の留学生も多く、講座の研究室を除いては留学生と日本人学生（特に学部生）との接点や知り合う機会がほとんどないのが実情であった。当時の留学生は、せっかく日本に留学したのに日本人学生と交友を持つ機会が少ないことに残念さと危機感を持ち、学内に立って日本人学生にチラシを渡すところから活動を始めたのだった。

それに対して、意識の高い日本人学生たちが積極的に呼応して「国際交流クラブ」が創設され、以来16年が経過して留学生の数も出身国も増え、また学部生の留学生も増えたことから、現在は留学生・日本人合わせて部員が50人以上の大きなサークルとなった。

大学祭への参加や、お花見やジンギスカンなど、日本・北海道らしい活動をともにするほか、日常生活の中で留学生と日本人学生の交友・交流が見られるようになったのは、国際交流クラブの大きな功績といえる。また、留学生の母国を支援する教育基金の募金を行ったり、地震のような大きな災害があったときに日本人学生がともに募金活動を行ったりするような、社会性を持つ活動も行っている。

また、国際交流クラブの部員からの海外研修や海外インターンシップへの参加者、海外留学の希望者が確実に増えてきている。

国際交流センターも、国際交流センター専任教員が顧問教員を務めるほか、センターとして国際交流クラブの活動にさまざまな形で支援を行なっている。また国際交流センターが行う行事に国際交流クラブの部員が参加したり協力したり、海外研修などにも応募者を出すなど、国際交流センターと密に関係を保ちつつ、学生側の国際交流活動の窓口として、また主体として大いに活躍している。



国際交流クラブで新生が先輩に自己紹介



新生歓迎会での一コマ

14. 広報活動

14.1 国際交流センターホームページ



日本語版TOPページ



英語版TOPページ

14.2 英文概要, 国際交流センター新聞



英文概要



国際交流センター新聞 創刊号

14.3 Tシャツ, フェイスタオル, ステッカー



Tシャツ (表)



Tシャツ(裏)



フェイスタオル



ステッカー

15. 教員の研究活動

野口 徹

○ 学会全国大会での特別講演

「工学教育における実践力教育・国際性教育の展開—海外インターンシップ教育の成果と課題—」

日本材料学会 平成 22 年度学術講演会 特別講演 2010 年 5 月 22 日 札幌 北海道大学

○ 室蘭工業大学公開講座

「なぜ物は壊れるの？ どうして事故は起こるの？ 暮らしの中の材料・強さと破壊のはなし」

2010 年 8 月 25 日～9 月 3 日, 4 回

苫小牧市 苫小牧信用金庫会議室, 苫小牧市教育文化会館

○ ウクライナ Priazovskyi State Technical University での講演

(1)Toru Noguchi : Introduction of Muroran Institute of Technology

(2)T. Noguchi, N. Horikawa : 「Principle of Bonding in Cast-in Insertion of Steel in Cast Iron」 75 Anniversary Memorial International Conference, Priazovskyi State Technical University, Mariupol, Ukraine 2010 年 9 月 9 日

○ 著書分担執筆

塩谷 優 他編, 野口 徹 他著

フラクトグラフィ—各種材料の破面解析とその事例— 第 1 章. 1. 鋳鉄 (株) テクノシステム) pp. 115-127 (2010)

門澤健也

○ ロータリークラブでの講話

「室蘭工業大学の国際交流の歴史—特に国際交流センター設立後の協定校との交流の活性化, 留学生の増加, 日本人学生・学外市民の方々との交流の活発化について」

室蘭ロータリークラブ講話 2010 年 12 月 16 日

○ 雑誌への寄稿 (依頼原稿)

「室蘭工大の学生が農業に学ぶ=新冠農業実習 10 年の軌跡」

農業雑誌「農家の友」2010 年 8 月号

山路奈保子

○ 論文

山路奈保子・因京子「論証の『厳密さ』に対する大学新入生の意識を向上させるには」『北海道言語文化研究』第 9 号 pp.63-74 (2011)

○ 研究発表

山路奈保子「日本人学生を対象とした多文化共生のための基礎教育の試み」東アジア日本語・日本文化研究会 第 12 回東アジア国際日本語・日本文化フォーラム 2011 年 2 月 18 日 九州大学伊都キャンパス

○ ロータリークラブでの講話

「アジアの西の端っこで ～トルコ滞在記」室蘭北ロータリークラブ講話 2011 年 2 月 22 日

16. 国際交流センターに関する新聞記事等

2010(平成22)年4月7日
朝刊
室工大国際交流センター

期待の「即戦力」新加入

山路准教授 留学生支援に意欲

山路准教授は「日本の伝統的なものづくり文化を多くの人に知ってもらいたい」と意欲を込めて、工大には

留学生の英語力向上を目的とした「英語研修」を、山路准教授が担当する。山路准教授は「日本の伝統的なものづくり文化を多くの人に知ってもらいたい」と意欲を込めて、工大には

山路准教授は「日本の伝統的なものづくり文化を多くの人に知ってもらいたい」と意欲を込めて、工大には

留学生ガイド好評

市内の観光客「分かりやすい」

留学生ガイドは、市内の観光客に好評を博している。ガイドは、留学生の生活や文化について詳しく説明し、市内の観光名所を紹介している。観光客からは「分かりやすい」と好評を博している。

留學生を日本好きに

地域力まで

留學生を日本好きにするには、地域力まで必要だ。留學生は、日本の文化や生活習慣を学ぶだけでなく、地域の人々と交流し、地域に貢献することが大切だ。

住民との触れ合い支援

留學生と住民との触れ合い支援。留學生は、住民と交流し、地域に貢献することが大切だ。住民は、留學生の文化や生活習慣を学ぶだけでなく、地域に貢献することが大切だ。

充実した留学生生活紹介

室工大国際交流センターが、留学生の生活を紹介している。留学生は、充実した生活を送ることができ、地域の人々と交流し、地域に貢献することが大切だ。

留學生を日本好きに

地域力まで

留學生を日本好きにするには、地域力まで必要だ。留學生は、日本の文化や生活習慣を学ぶだけでなく、地域の人々と交流し、地域に貢献することが大切だ。

住民との触れ合い支援

留學生と住民との触れ合い支援。留學生は、住民と交流し、地域に貢献することが大切だ。住民は、留學生の文化や生活習慣を学ぶだけでなく、地域に貢献することが大切だ。

み熱気最高潮

むろらん港まつり

3年ぶり市民おどりも

むろらん港まつりは、市民おどりが最高潮を迎えている。市民おどりは、市民の心を一つにし、地域に貢献することが大切だ。

笑顔、躍動感あふれる夏の祭典



写真で振り返る「ひろらん地蔵つり」

「夏祭りの盛り上がりを見守る中、留学生も積極的に参加し、和やかな雰囲気の中で交流を深めた。また、伝統的な踊りや音楽を通じて、日本の文化を体験する機会も多かった。



異文化体験を披露



留学生が自国の文化や習慣を、日本の学生に紹介する機会があった。お互いの違いを認め、理解を深めることができた。

法被姿で盆踊り

盆踊り 日本文化楽しむ



盆踊りを通じて、日本の伝統文化を体験し、和やかな交流がもたらされた。

室工大国際交流センター

留学生の活動サポート



留学生の生活や学習をサポートするための様々なサービスを提供している。

室工大姉妹校からの留学生

イさん 中国に帰国

数々の思い出を胸に



室工大での生活や学習を通じて、多くの思い出を積み重ねた。

価値観 大きく変わった

「将来 海外関連の仕事へ」

室工大 藤原さん



海外での生活や学習を通じて、価値観が大きく変わった。

スタッフ 外国語堪能

協定拡大視野に交際へ



外国語が堪能なスタッフが、留学生をサポートしている。

ざっくばらんに異文化交流

室工大



留学生と日本人学生が、ざっくばらんに交流を深めている。

室工大が学術協定

締結は14カ国29大に

台湾、ウクライナ



学術協定を締結し、国際的な学術交流を促進している。

学生がテーマ決め討論

風習の違い幅広く学ぶ

国際的な視野広げて



学生がテーマを決めて、国際的な視野を広げている。

研究成果を発表



研究成果を発表し、国際的な学術交流を促進している。

エジプト

室蘭にも波及

出張取りやめ、ツアー中止



エジプトで発生した大規模な暴動が、日本に波及し、エジプトからの観光客が減少している。また、エジプトへの出張やツアーも中止されている。...

室蘭での生活

「楽しかった」

卒業祝福、交流も推進



卒業生が卒業式を終え、卒業生と教職員が交流を推進している。卒業生は「楽しかった」と感想を述べている。...

母国動乱に心痛め

「危険な状態」

リビアのオマルさん



リビアで発生した動乱に心痛めるオマルさん。リビアは「危険な状態」にあると述べている。...

日中のため働きたい

中国人留学生の増加



日中関係の改善により、中国人留学生が増加している。多くの学生が「日中のため働きたい」と述べている。...

日本語能力試験

最難関 N1 合格

室工大留学生ニサさん 新聞論説も理解



室工大留学生のニサさんが、日本語能力試験の最難関 N1 に合格した。彼女は新聞論説も理解できると述べている。...

冬道運転の知識習得

留学生対象に初の講習会



室工大で初の留学生対象の冬道運転講習会が開催された。参加者は冬道の運転知識を習得した。...

着物で離園惜しむ

卒業式で着物を着用する留学生も

卒業式で着物を着用する留学生も参加した。卒業生は着物を着て離園を惜しむ様子が見られた。...

母国騒乱眠れぬ日々

家族消息不明「つらい」

室工大・リビア人留学生オマルさん



リビアで発生した騒乱により、オマルさんは家族の消息が不明で、眠れぬ日々を送っている。...

冬道運転の知識習得

留学生対象に初の講習会

マレーシア「参考になった」

中国の8人



マレーシアの8人が講習会に参加し、「参考になった」と述べている。...

17. おわりに

—真に稔りある、地域ぐるみの国際交流を目指して—

国際交流センター准教授 門澤 健也

2007(平成 19)年4月に室蘭工業大学国際交流センターが発足してから、早くも4年の歳月を閲し、いま、発足5年目になる2011年百花繚乱の春に、この2010年度の報告書を製作している。

「産みの苦しみ」という言葉が示すように、新しいことを始めたり、新しいものを作ったりするには、常に苦勞がつきまとう。5年前に、この国際交流センターを新設するための設立準備委員会でも、何を目標にしたどのような組織で、学内の位置づけ・業務の内容と範囲をどう定めるか、規模・人員はどのくらいで、スタッフはどのような業務分担をするのか、人員をまとめて一つの独立した部局とするのか、あるいは各自別の部局に所属する人員を形式的にまとめたバーチャルな組織とするのか、独立した部局とする場合、場所をどこに設置するのか、などなどについて侃侃諤諤の議論がなされた。そして、最終的には国際交流担当理事をセンター長にいただき、常勤・非常勤の事務職員5名・教員2名の合計8人をメンバーとする独立した部署として、現在のような組織で業務を遂行することとなった。

設立後4年を経過した今、私たちはこの結論が正しかったことを実感している。国際交流・留学生関係のあらゆる業務について、スタッフの分担・協力のよき関係を築き、また各学科から選出された10名の教員を加えた「国際交流委員会」を設置し、議決機関としてのみならず、実行機関としての役割も果たしていくこととなった。

冒頭に「産みの苦しみ」と記したが、新たに創設した組織を継続的・発展的・創造的に運営していくことには、それ以上のエネルギーを必要とする。しかしながら、上に述べたような充実した組織として円滑に業務を行うことにより、実績として留学生数は、センター設置前の45名から2010(平成22)年1月1日現在で114名まで増え、17大学だった学術交流協定校は28大学1機関まで増加するに至った。これは単に、数を競ったり誇ったりする意味ではなく、本学全体の国際交流活動が、実際に活性化してきたことを象徴する数字であると考えている。

2010(平成22)年度最初の大きなトピックは、専任教員の一人として、日本語教育担当教員である山路奈保子准教授を迎えたことであった。日本語教員の増員は、センター前身の国際交流室の時代からの希望であったが、留学生の総数と担当教科の関係から、実現しなかった。今回留学生数が100名を超えたことと、センター長の英断により日本語教員2人体制が整うこととなった。業務としては、二人とも日本語教育だけではなく、国際交流全般を担っている。

これにより、日本語科目のコースデザインそのものが、バラエティーに富み、かつバランスのとれたものとなり、留学生のニーズにより広く的確に答えることができるようになった。これは国際交流センターとして、また大学全体として、非常に大きなメリットであると考えている。

2010(平成22)年度のもう一つのエポックは、野口徹センター長(理事)の強力なリーダーシップによる海外インターンシップの派遣と受け入れが、今年度、緒に就いたと同時に、今後への展望を拓く大きな足

掛かりを作ることができたことであった。詳細は、前のそれについての項目を参照されたいが、IAESTE(国際学生技術研修協会)により日本人学生のハンガリーへの海外インターンシップに派遣し、フランスの2名の学生を機械航空創造系へ受け入れた。ともに当事者である学生・受け入れ教員ともども、大いに満足できる結果が得られたものと自負している。

また、2009年から実施している佐藤矩康博士の奨学奨励賞を受けて海外発表を行う機会を与えられる学生も年々増加しており、これもまた軌道に乗ってきたと考えている。

さらに、海外の協定校からの短期交換留学の希望者が飛躍的に増加し、2010年度は、協定校9大学から合計30人の応募があり、うち19人が実際に本学に留学した。これらの多くはアジア圏からの留学生で、日本人学生との交流や親睦の機会を積極的に求め、同じ研究室に所属する日本人学生の国際性の啓発や、学生サークルである「国際交流クラブ」の活動の活性化の大きな原動力となっている。このようなことが土台となって、留学生と日本人学生、あるいは留学生同士の若者たちの交流が、これからの大学の国際化や、学生の国際性の涵養につながっていくものと、非常に喜ばしく感じている。

また、協定校との短期交換留学制度を利用して、半年ないし1年間室蘭工業大学で学び、本学や室蘭の地域を気に入る、適切な指導教官を見つけて、その後修士課程や博士課程に再度留学してくるパターンも、定着してきた。2010年度はこれまでの短期留学生から5名が博士課程に入学・在籍しており、この報告書を編集している2011年6月現在も前年度の短期留学生から3名が博士課程に応募する予定である。

このほか、ラオス人・マレーシア人の、高専からの編入留学生も増加しており、これは本学で学んだ先輩の留学生が、日本国内の高専に在籍する留学生に、「編入するなら室蘭工大がいい」と、口コミで推薦してくれているケースが多い。

協定校との研究交流活動では、チェンマイ大学工学部と本学の機械コースの間で、1年に1回それぞれの大学で学生の参加を含む合同シンポジウムを、会場を交互に替えて開催することになり、2010年11月には第1回シンポジウムをチェンマイで行い、本学からは教員8名と大学院生11人が参加、このうちの1名が2011年度にはチェンマイ大学に短期留学する予定である。

オーストラリアの協定校ロイヤルメルボルン工科大学(RMIT)との語学研修の交流も歴史を重ね、2010年度は12期目の英語研修グループをRMITに2週間派遣、RMITからは6回目の日本語研修グループを受け入れた。また、ヨーロッパ語学研修も、3期目を数えた2010年度は、本学から13名、国内提携校の東京都市大学から8名の合計21名の参加を得て実施されたことも特筆しておきたい。

大学の国際交流活動の目的として、教育・研究を通じた国際貢献、留学生交流・研究交流によるわが国の大学の教育研究の活性化・国際化、留学生の数などで示されるわが国の国際社会に対するプレゼンスの主張、国際社会における産業の国際的競争力の強化など、国策としての面はもちろんあるが、実際の大学教育の現場では、われわれの国際交流センターが中心となって、留学生に対する温かい心のこもった支援を行うこと、またそれにとどまらず、留学生と日本人学生・教員との相互交流・相互理解の機会を、できるだけいい形で提供していくことが重要な任務であると考えている。そのためには、留学生には大学での勉学や研究のとどまらず、日本や日本人について、よい面・学ぶべき点だけでなく批判的に見るべき面も含めて理解を深め、友人をたくさん作って未来の日本との架け橋になってもらいたい。また日

本人学生には、異文化からの使者である留学生を通じて、国際的な視野を拓げ、室蘭からさらに世界を目指すような志を培ってもらうことを、重要な目標と考えている。

室蘭は日本の北端、北海道の人口10万人に満たない地方の小都市であり、本来、留学生を多数受け入れるためのキャパシティーには恵まれていないように見える。しかしながら、本学に来学した留学生たちは、1年から、最も長い場合には9年間の留学期間中に、学内の友人・知人・教員だけでなく、学外の一般の人々、いわば「市井の人々」との間にも深い親交を結び、「日本でのお父さん・お母さん」のような交友関係を築き、室蘭工業大学での留学生活に加えて、室蘭を「第二の故郷」、日本を「第二の母国」と感じて巣立っていく留学生が非常に多い。また、その日本での「お父さん・お母さん」たちが、帰国後の留学生の母国を訪ねるような交流も続いている。

これらはまさに、「ローカルからグローバルへ」「グローバルからローカルへ」のよき例であり、この意味では、本学は留学生受入れの初期の段階から、本当の意味での知日家、親日家を育ててきていたものと自負している。また、これは、留学生を含む外来者を、垣根を設けず迎えようとする北海道人・室蘭人の温かく懐深い度量に支えられていることにも、心から感謝したい。

国際交流の基本は、国境や文化を越えて人と人が出会い、互いに関心を持ち、友人として助け合い、一個の人間としての尊敬や尊重、協力や協同の気運を作っていくことである。これが国と国、人と人との相互理解や国際協力、さらに大きく言えば世界の平和につながっていくことであると確信する。

国際交流センターの責務は、国や大学としての必須、喫緊の課題を解決し実現していくと同時に、血の通った地道な活動を息長く継続していくことであると考えて、教職員一同、今後とも誇りと使命感を持ち、室蘭にとどまらず日本全体、さらには世界全体を視座に据えて、一致協力して日々の業務に取り組んでいきたい。



室蘭工業大学国際交流センター

〒050-8585 室蘭市水元町27番1号

<http://www.muroran-it.ac.jp/>

E-mail: kokusai@mmm.muroran-it.ac.jp

TEL: (0143) 46-5885

FAX: (0143) 46-5889